
魔法少女リリカルなのは 守るための戦い

吉田佳樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 守るための戦い

【Nコード】

N8519M

【作者名】

吉田佳樹

【あらすじ】

神との契約によってs t sの世界へ転生した主人公「ウィルズ・レータ」

原作どおりに進むのかと思っていたがなにやらそうではないらしい。スカリエッティのほかの組織が暗躍している。果たしてなのはたちの運命は

この小説は原作ブレイク、チートなどが含まれています。初めての小説なので、至らないところもあるかと思いますが、よろしくおねがい

します。

プロローグ（前書き）

転生した理由と、転生初日を描きたいと思います^^
初めての作品でへたっぴですが、あったかい目で見てください^^

プロローグ

僕、「ウィルズ・レータ」は旅行中だった。夏休みを利用した暇つぶしのつもりだった、けど、不幸にも僕は震度7の大地震に巻き込まれ、あっけなく建物の下敷きになり 虫の息……。

やっべ、もう死にそう……。あー親とかどう思っかね。まあ、いまさらどうしようもないか（笑）

なんて思っていたら、目の前が明るくなった

あれ？まだ夜のはずだけど、もしかして救助隊の人？

「ゲホっ（おーい）ゲホッ（おーい）」やっべ声でねーや、まさかこんな早くに死ぬなんてな……。

惨めだぜ……。なんて考えてたら、目の前の光から

「あなたは生きたいですか？」と聞かれた

「ああ、もちろん。と言うかあんた誰だよw」と軽く突っ込んでみると、

「ワタスハ神です。あっ噛んじゃった（汗）ゴホン（咳払い）私は神です！」

へえー神様にドジっ子がいたとは！

てかそこは置いといて、「で、その自称神様がこの瀕死の僕に何の

ようですか？」

「私はあなたにもう一度生きて欲しい。そして、救って欲しい世界がある」

「世界を救え？ちょっと、僕はそんなご大層な人間じゃないですよ（笑） ちょっとオタクが入ったただの高校生です」

「いいえ、あなたは救うことができる。不幸な人を幸せにできる。だってそうでしょ、あなたは相当なお人よしだもん」

「だもん じゃない！まあ、確かにお人よしだけど、それとこれにどんな関係がある？つべこべ言わない、あなたは生きたいの？それとも死にたいの？どっち？」生きたいですよ！」

ちえっまた面倒に巻き込まれた！

「そう、じゃああなたに2つ目の人生をあげます。そして、「リリカルなのは」の世界へ転生してもらいます。いいですか？」

「はい、わかりました・・・ってはい？」「どうしました？」

「リリカルなのはの世界ってどういうことよ、あれってアニメの世界でしょ？」

「いいえ、あなたの世界ではそうでも、別のところではしっかり世界があります。しかし、その世界が最近危なくなってきて・・・、だから、あなたに転生してもらいます。」

「まあ、わかりましたよ。でも、僕には魔法の知識や強い特技なん

てありませんよ?」

「まあまあ、そこらへんは神の力で何とかしとくわ。楽しみにしておいて。」

「たのしみにつて・・・まあ、頼みますよ」

「じゃあ、心の準備はいいかしら?」

「はい、お願いします!」

「じゃあ、いつてらっしゃいノシ未来の救世主!」

「はあ、かつたりい」

こんな経緯で僕は今どこにいるのかというと、地球の海鳴市。つまりなのはの故郷だ。

そしてなぜか、体が小さくなった気がする。時期的には2期が終わった頃らしい。

うーんこれからどうしていこう。

そうだ、まずは、神様が行っていた能力つてやつを試そうじゃないか。いやあ、いい暇つぶしだ^^

結果からいうと、2つ目の人格が植えつけられ、とある物語の主人公ぐらいの吸血鬼の能力をもらい、これまたとある物語の第一位のベクトル操作をもらった。しかしベクトル操作はフル稼働で30分ほどしか使えず、吸血鬼の能力もちよつと傷の直りが人より早い程度。2つ目の人格なんて、ハルヤさん見たいで怖かった。まあ、

あの人ほどツンではなかったが、凶暴なのは確かである。まあ、整理すると、どれも微妙で使い勝手が難しい。まあ、前世で好きだったアニメのキャラの能力だったからいいかな^^；

さて、これからどうしよう……。途方にくれていると、目の前を見知った顔が通った。(まあ、知ってるのは僕がアニメで見たただけだね)

そう、リンディ・ハラOWN提督である。

「あの〜」 緊張気味

「何かしら」 ニコつと笑顔で

「僕を養子にしてください！」 土下座

「あら大胆ね、でも、養子は無理かな……。今フェイトさんもいるし。」

ああ、そうか、そういえば今はそういう時期か。

「でも、まあ、小さい子が一人の夜道も危険だし、今日はうちに泊まっていきなさい」と笑顔でいつてくれた。

あなたは女神ですか！と一瞬思ってしまうほど美しい笑顔だった。

その時！リンディさんの背後の男が、突然リンディさんに向かって銃を発砲した

リンディさんはココでは魔法があまり使えない。なぜなら地球には

魔法が存在しないからフェイトのためにもあまり非現実的な行動ができないのだ。

ココは仕方がない。

僕はくびにある電極のチャージャーのスイッチを戦闘用にオンにした。

そう、ベクトル操作。

結果、銃弾は反射され男の手に当たった。男は自分の手を見て何が起ったのか把握しきれず呆然としていやがやがて、手から来る激痛に耐えかねて咲き美ながら逃げていった。

「あなた今のはなに？」とちょっと真剣な顔つきで聞いてくるリンディさん

「詳しくはリンディさんの家に行ってからお話します。あつ自己紹介まだでしたね、僕はウィルズ・レータです。よろしくお願いします」と誠意一杯の笑顔で挨拶した。

その後、リンディさんの家で、クロノ執務官、フェイトさん、リンディさん、に転生経緯から、自分の持つ能力まですべてを隠さずにはなした。そう、ここで話したことで僕の物語は急速に進み始めるのであった。

プロローグ（後書き）

佳樹> 皆さんこんにちは、プロローグいかがでしょうか、もっといろいろ書きたかったんですが、まだ初めてということとで勝手がわからずこんな駄文になってしまいました。すいません。

ウィルズ> そうそう、はじめは軽い自己紹介程度のはずだったんだけど、この日と文章書くのの下手だから・・・。

佳樹> 次はがんばります・・・。

ウィルズ> それでは次回始まりは突然に

ウィ・佳> 新たな物語へ take・off

始まりは突然に（前書き）

ついに、というか、いきなり本編に介入します。
いい文になるようできるだけ努力するので、応援お願いします。

始まりは突然に

リンディさんに出会って早くも2年後

僕は今管理局で働いている。もちろん能力は隠している。一人のとき意外は使わないと決めているからだ。

ちなみに今は11歳（転生した時点で9歳だったらしい）、位は一等兵まあ、妥当といえば妥当。死にそうな仕事もなかったしこれといって秀でたところがないので、これでいいだろう。

そして、今日は、あのなのはさんと一緒にミツシヨンに参加する。

「ヤッホーい、ヤッホーい」と一人宿舎で喜んでいた。

しかし、僕は忘れていた、闇の書事件から2年後の悲劇を、そして自分で決めた戒めを後悔するということを

今日は管理外世界で、異質物の搜索だった。そう、あの事件の日だった。

現場に到着して気づいた。今日は、なのはさんの人生にかかわる重大な事件が発生する日だった。

突然現れた敵に襲われ、大怪我をする日だと。

そして、数時間後、目的を終えて帰ろうとしたとき、なのはさんの小さな体から爪のようなものが飛び出した。

なのはさんは、レイジングハートで応戦しようとしたが、傷が深すぎてうまく戦えなかった。

ヴィータさんは、なのはがされたことに困惑して動けなくなっている。

そして、未確認の敵は、なのはさんにトドメを刺そうとしていた。

仕方がないか、と僕は小さく笑った。

みんなの前では使いたくなかったんだけどな……。

支給品のストレージタイプじゃ勝てるはずもない。

そう呟きながら首のチョーカーに手を回しスイッチを入れた。

そして、足の運動のベクトルを操作し、一気になのはさんのもとへ向かった。

しかし、それでも、敵が先にトドメを刺すか、ギリギリ間に合うかどうか。

結果はギリギリ間に合わなかった。

なのはさんが死んだって？

オイオイ勝手に勘違いすんなよ。生きてるよ。

僕は突き刺されながら勝手に突っ込んでいた。

いてえ、洒落になんねえってこれ、

吸血鬼の能力追いつくかな・・・。

なんて楽観的な考え方をしていた。

そう、ギリギリ間に合わなかったが、捨て身で僕が割って入ったことにより、なのはさんはどうにか、死なずにすんだ。

はあ、よかった。

世界が崩壊するかもって、なのはさんが死ぬからかな、これで死ななければアニメ第3期みたいに解決してくれるよな。とおぼろげな意識で笑っていた。

すると、ヴィータさんが

「オイ！死ぬな！お前が死んだら、なのはが悲しむだろ！生きろよ！」とか何とかいいながら体を揺すっている

あーヤベっ意識がもうもたねー。

案外短い第2の人生だったな。と思った瞬間。体の中のもう一人が目覚めた。

「オイ、ウィルズ、勝手に死んでんじゃねえぞまったく。こんな小娘のために死ぬなんざあ俺はごめんだ。だからさあ、体貸せよ！」

「ウィルス、やめろ、から・・・だが・・・もたねえ」

「アン？この敵ブチ壊せばいいんだろ？速攻でかたずけてやんよ！」
そういつた瞬間、体の主導権は、僕の半身ウィルスにとられ、凶暴的な人格が表に出た。

そばで体を揺すっていたヴィータが

「オイ、やめろよおめえ死ぬ気か！」と声を荒げた

「ごちゃごちゃうつせんだよこの三下が！、こんな小娘一人が指されたくらいで動揺しやがつてよ。おかげで俺が死にそうじゃねえか。つたく、めんどくせえからとりあえずザコは引っ込んでろ！」

そういうと、ウィルスは、敵に向かって一気に加速した。

そして、敵をめちやくちやに壊し始めた。それはもう地獄といつていいくらいひどい光景で、実際吐いていた人が数人いたくらいだ。ベルカの騎士のヴィータでさえちよつと涙目だ。

「オイどうしたもつと抵抗しろ・・・。つまんねえなあ・・・。」

「ウィルスもうやめてくれ、頼むから」

「あん？今いいところなんだよ！」

「頼むからもうやめてくれ！」

「まったくしょうがねえな、お優しいウィルズさんにはかなわねえよ」

「ふう」と僕は安堵した。だが、僕はウィルズという人格侮っていた、買いかぶっていた。

「なんていうと思ったか？ そんなことはしねえよ！ ほら行くぜ！ 楽しいよな！ なあ！ ウィルズ！！！」

とウィルスは狂気のような笑みを浮かべながら、敵の内部の機械のベクトルを一気に逆にして、粉碎した。

その場にいた全員がこの世のものではない顔で僕を見た。

管理局に戻ってから、ヴィータさんやフェイトさんはやてさんに守護騎士の皆さんに問い詰められた。

「オイ！ さっきのはなんだ！？ お前死にそうだったのによ！ いきなり立ち上がって大量殺人者みてえになつてよ！ しかも、あの魔法は何だ？ 敵の攻撃を反射してるみたいだったぞ！ それに、今お前怪我が治ってるのはどういうことなんだ？ オイ！ 答えるよ！」

「少し冷静になれヴィータ」とシグナムがなだめる。

「まあ、まずはなのはちゃん助けちゃってありがとう」

「うん、なのはを助けてくれてありがとう」

とはやてさん、フェイトさんにお礼を言われた。

「でも、自分のあの力はいつたいなんなん？」とはやてが聞いてきたので、僕は包み隠さずしゃべった。もちろん他言無用をお願いしてだ。他に一緒に言った局員には、「いきなりのことのできが動転した」と誤魔化しておいた。

「僕、元々この世界の人じゃないんですよ」といきなり話し始めた。それから、ベクトル操作、治癒能力、反射を司るもう一人の人格（ちなみに思考は僕だ。）の話をした。

皆信じられなさそうな顔をしていたが、現に目の前に証拠となることを目撃しているので、何の反論も異論も出なかった。

「お前意外とすごいやつだったんだな」とヴィータ

「一度模擬戦を試してみたくなった」シグナム

いや、あなたに勝てるはずないじゃないっすか

「とにかく、自分気いつけえやあ、あんたの半身めっちゃこわいで」

「でも、なのはを助けてくれてありがとう」

はやてさんに釘を刺され、フェイトさんにもう一度お礼を言われた。

「いえ、自分にできることをやっただけです。そういえばなのはさん、いつごろ目が覚めるんでしょうか？」

「ああ、今もうさめとるらしいけど、あしたにしてやってくれへんか？」

「わかりました。いやあ、今日はご迷惑をおかけしました。では、改めてあしたお見舞いにでも行ってきます。」

「ほんならなあ」

「じゃあ気をつけて」など、皆別れの言葉を言って帰っていった。

宿舎にて

「オイ、何でかって死のうとしたんだよ！俺はまだ死にたくねえんだよ！」

「ウィルスでも、あれはやりすぎだろう？もうちょつと手加減をうるせえ、お前がへましなかったら、もっと余裕があつたんだ！」「あーわかつたわかつた。誤るよすまねえ。ココで相談なんだが。」

「アンなんだよ。」

「これからはさ、戦闘中一緒に行動しねえか？だって思考と反射がばらばらって不便でしょ？」

「まあ、それもそうか、わかつた、いいぜ」

あらま意外とあっさりうなずいてくれた。

確かガンムではもっと手こずっていたような・・・。

でも、まあいいか、これで、一気に戦闘能力が上がる。

なんて考えてるうちに、眠くなってきた。

あしたしっかりお見舞いに行こう。

そう決めて僕はベットに入った。

始まりは突然に（後書き）

佳>はい、皆さんこんにちは、今回もいろいろと日がないところがある文章にお付き合いたいでありがとうございました^^

ウィ>はい、出ましたね^^相方登場！これから真の超 ですね^^それにしても、デバイスってまだストレージタイプだったんだ

佳>そうですね、stssに入ったときに、新しいやつに変わっています。

ウィ>そいつは楽しみだな^^

佳>それでは、また次回に

佳・ウィ>Take・Off

遂に機動！ようやく手に入ったインテリジェントデバイス（前書き）

ようやく、主人公にデバイスができます。

もうすこしで、STSの本編に絡み始めます。

今回はその下準備です。

遂に機動！ようやく手に入ったインテリジェントデバイス

僕は翌朝、なのはさんのお見舞いに行った後、本局に呼ばれ、なのはさんのミスを隠すために濡れ衣を着せられた。

「君の独断によるミスということにするがいいかね？」と名前も知らないおっさんが聞いてきた。

「はい、結構です。そのかわり、無人世界への任務をくださいますか？」と聞いた。

「そのようなものでいいならあげるよ。ほとぼりが冷めるまで、無人世界にいるといい、本当はこんなまねはしたくないんだがね。これも、管理局の未来のためだ。許してくれ」

「はい、高町なのはさんの未来のためには仕方がないですよね。」とちよつと苦笑いしながら答えた。

ハハハ・・・、わかつていたが、まさか、ほんとに隠蔽するとは、悪い噂だけは立ってほしくないんだけどな・・・。

そう思いながら、その場を後にし、僕は、無人世界へ行くための準備をし始めた。

「えーっと、服はもったし、食料も管理局がちよくちよく持ってきてくれると、後何があるかな？」

なんて考えていると、

「あつ、なのはさん助けたときに自分のデバイス置いてきた……。ヤバっ、もう一本もらうことはできそうもないしな……。しゃあない自分で作るか。」

僕はいろいろと考えながらデバイスを作り始めた。

せっかくだから、ストレージタイプじゃなくて、インテリジェントデバイスにしよう！

うん、そのほうが無人世界でも寂しくない。

とかなんとか、ぶつぶつ呟きながら、デバイス作りに没頭していた。

そして、数日後、なんとかデバイスが完成。

形状はというと、僕自身の戦闘スタイルに合わせて、オールレンジ対応で作ってみました。

「管理者機能フルオープン。」すると、僕の足元に、青いミットチルダ方式の魔方陣が広がる。

「トリシューラ・ユニバース！セット・アップ！」

そうすると、バリアジャケットに変身するのだが、なんというか、あまりイメージが浮かばなかったので、前世ではまっていたゲームモンのギルドナイト蒼の頭だけつけてないものを想像して、バリアジャケットとして設定した。

うんうん、うまくいった。

さて、早速、出発しますか。

と出発する前に、僕のデバイスについてちょっと説明しよう。

このデバイスは、神話上の武器トリシューラという三叉槍の形状を元に、カートリッジシステムを搭載し、どこまでも無限にという意味をこめて後ろにユニバースとつけた。

性能は、そのまま槍として近接戦闘にも使えるし、魔法の杖としても使える。

フォルムチェンジについてはおいおい説明します。今は第一形態で十分戦えますから。

そうこうしてる内に、目的地についてしまった。

任務は、ロストログアの確保。

それじゃあ、行ってきますかね。

若干11歳で無人島暮らしはつらいがこれからがんばっていきますか。

一日目は、無人島探索をただけで終わってしまった。

案外食料とかあるんだね。意外だったは（笑）

でも、探索の途中で見つけた真新しい研究所、ココって誰もいないはずじゃなかったっけ？

まあ、怪しいからあしたからそこを中心にロストログアを探していきましょう。

あーあつ、疲れたから今日は寝よう。おやすみ

「おやすみなさい、マイマスター」

「うん、おやすみー……ってオイ！いまさら出てくるなトリシューラ！」

「なんでしよう？何かご不満でも？」

「ありません。ごめんなさい。」

はあ、機動初日からこんな感じが、まあ、仲が悪いより良いに越したことはないか。

まずは、あしたに備えてしっかり寝よう。

遂に機動！ようやく手に入ったインテリジェントデバイス（後書き）

グダグダでごめんなさい。

やっと、起動しましたね、トリシューラ。

次回からは、いよいよ、六課に絡んでいきます。

一気に年が飛びます。

そこらへんはご了承ください。

それではまた次回へ

t a k e ・ o f f

接触！！戦闘機人プロト0！（前書き）

ちょっと短いですが、戦闘機人との接触を書きたいと思います。

接触！！戦闘機人プロト0！

翌朝、僕とトリシューラは研究室に潜入した。

それからしばらく進んでいると

「うわぁ、やっぱり不気味だなぁ」

「そんなこと言ってる場合じゃありませんよマイマスター」

「そのようだな」

よく見ると、前から誰かが歩いてきた。

おんな？

「ドクターがあなたを欲しがっています。」

「なぜ僕が必要なんだ？」

「分かりません。ですが、命令には忠実に動くものです。」

僕が知ってる戦闘機人とは少し違う。試作機だからだろうか、感情がないように思われる。

「僕がついて行かないといったら？」

「力ずくで連れて行くまでです。」

プロト0はそういうと、すごい速さで僕に突っ込んできた。

「クソっ！トリシューラ！！！」

ガキン！！！！

なんとか受け止めた、しかし

「クッ！！！！」手ごわい。試作機でも、オーバーAランクぐらいありそうだ。

ちなみに僕はAランクね。

「速攻で終わらせるしかなさそうだね。」そいいながら、ぼくはチョーカーに手を回した。

直後、僕はベクトル操作を手にした。

ゴバ！！！！

地面が盛り上がり彼女に襲い掛かる。

「ひい！！」少し顔が引きつった。

どうやら恐怖はあるらしい。

「一気に片付けさせてもらっよ。」静かにそういうと僕はベクトルを下にして加速した。

「これでチェックメイトだ！」

プロト0はものの見事に吹き飛んだ、案外早く片付いたな。

でも、うわぁ、さすがにやりすぎだな、でも、まあ良いか、早く管理局に

「ぐああ……！」なんだこれ？痛い？なぜ？

よく見ると、プロト0は僕に向かって最後の力で魔力弾を打ち込んでいた。

「せっかく殺さなかったのに……、お前は……！……オマエは……！……！！……！！」

僕はそういうと、血だらけの体で、プロト0に向かっていった。そして、その直後、辺りが静寂に包まれた。

それから、8年後

ついに、六課に転属になった。

接触！！戦闘機人プロト0！（後書き）

中途半端ですね。でも、これでいいんです。この中途半端な終わりが、後々つながっていく予定です。

本当は、もっと早く更新できる予定でしたが、なんと2度もエラーになって、内容が全部パーになってしまいました。

だから、今回は、予定より大幅にカットした、内容で書かせていただきます。

六課に転属したときの話は、また次で書かせていただきます。

それでは次回へ t a k e o f f

六課初日、意外と個性きついね、このメンバーは、（前書き）

今回は、平和的に、日常風景を書けたらと思います。

でも、ちょっとバトルがあるかもね（笑）

六課初日、意外と個性きついね、このメンバーは、

「あれから八年か」

そう呟いて歩いてきたのは、僕こと、ウィルズ・レータ。一応階級も三頭空尉まで上がり、ランクもAAまで上がった。僕が今どこにいるのかというと、六課の隊舎前。結成から一週間たっている。

なぜ一週間もたっているのかというと、正式な転属命令がなかったので、無理やり転属命令を出してもらった。

うん、ちょっと荒事をしてきたけど、良いよね？

「さあ、って、早く八神部隊長に挨拶してこないと・・・ん？」

なにやら向こうから爆発音やら何やらが聞こえる。教導？

「行ってみるか？トリシューラ」

「お好きにどうぞ」この八年でトリシューラとはかなり仲良くなりタメで話せる仲になった。

トリシューラもこういつてるし、行ってみよう！

「sadeFW陣」

ティア「射撃型無効化されたからってはいそうですかって、引き下がってちゃ、生き残れないのよ!!」

ティア「スバル、上からしとめるからそのまま追つてて」

スバル「おう!!」

ティア「砲撃の弾丸を、無効化される魔力フィールドで膜状にくるむ。フィールドを突き抜けるまで、外殻が持てば、本命の弾はターゲットに届く!!」

なのは「フィールド系防御を突き抜ける多重弾核射撃、AAランク魔導師のスキルなんだけどね」

ティア「固まれ・・・固まれ・・・固まれ・・・固まれ!!うりゃあぁ!!!!バリアブルシールド!!!!!!」

スバル「ティア!」ナイス!ナイスだよティア!」

ティア「ハアハアハア、うるさい、うるさい・・・ハア、このくらい当然よ」

s a d e F W 陣了

「おおくやるねえ。」と僕は素直に賞賛した。

だって僕と同ランクのスキルだぜ?

なのは「あつ!ウィルズ君いたんだ?」やっと気づきましたか(笑)

「さつきからね、はやて部隊長は?」

「今いないんだよねえ、夜には帰ってくるらしいけど」

「うわぁ、すっぱかされた」

「にやはは、それは不幸だね。」となのはが笑っていると、モニターの女性が

「あの、なのはさん？この子は誰ですか？」

「この子っていうな！それでも僕はなのはさんと同い年だぞ！！！」
どーせ僕は小さいですよーだ。フン

「えっと、ウィルズ・レーテ三等空尉・・・私の命の恩人かな。」

「えっ？じゃあ、8年前、なのはさんを助けたのって、この人ですか！？」

どうやら彼女、シャーリーは知らないらしい。それもそうである、この件は隠蔽されたことであるからだ、だってそうだろ？エースオブエースの経歴に傷なんかつけないだろ。

「なのはさん、そちらの方は？」FW陣が帰ってきてみたい。

「うんつとね、簡単に言えば、恩人。詳しくはプライベートだからこれ以上はいえません。」

「恩人ってすごいですね。」とエリオが目をきらきらしながら言うてくる。

「いや、大したことはないよ。僕なんて、なのはさんに足元にも及ばないもん。」

「うそついたらだめだよウィルズ君。本とはもつと強いくせに。」
となのはが肘で僕を小突いた。

「そんなにすごいんですか？」とキャラ

「ぜひ戦ってみたいです！」と元気にスバルが言った。

「さっきの多重核弾すごかったね。」と僕がティアに話しかけた。

「こんなのできて当たり前です。」ときっぱり言われてしまった。
うゝん嫌われた？

「そんなことより、なのはさんの恩人って本当ですか？そんなに強
そうには見せませんけど。」

いきなり突つかかれても。

「ティアナ、そんなこといったらいけないよ」

「私には、この人が強いとは思えません。模擬戦をやらせてくださ
い。」

「ティアナは一度言い出したら聞かないからな、わかったよ、でも、
スバルとペアね？」

「何で、ペア？私一人で十分です。」

「良いからペアでやりなさい。でなきゃ、模擬戦はなしだよ？」

「わ、わかりました。」

オイオイ、当事者抜きで決めないで……。

そんなわけで僕は乗り気じゃないけど、模擬戦が始まりました。初日から全力全開なんて、不幸だ。

「あのー、なのはさん？どの程度までならよいのでしょうか？」

「うーん、ちょっとお仕置きもかねてるから、ベクトル操作までならOKかな。」

お仕置きっすか、恐ろしいですね。

「なんか今よくないこと考えてなかったかな？」

なのはさん、笑顔が怖い……。

まあ、とにかくベクトル操作までなら良いのか。かったるいけど、はじめるか。

「スバル行くわよ！」

「うん」と二人が向かってきた。

チョーカーのスイッチはオッケーっと。さて、ほんとにはじめるか。

「いつけえー！ー！！！」とティアナが魔力弾を複数打ち込んだ。き

僕はそれを余裕でかわす。

「うおおりゃああ！！！」と今度はスバルが突っ込んできた。

「よつと」僕はトリシューラで受け止めた。

「うん、いい感じだね、でも、ちょっとまっすぐ過ぎない？」という僕はスバルにむかって魔法を撃った。

「マーキュリーファイヤー！！！」ファイヤーっていつてるけど、属性は氷だよ？何年か前にクロノさんに鍛えてもらった。

「うわああ」とスバルはなんとかよけた。さっきスバルがいた場所には、氷の塊ができていた。

「うわあ、いきなり飛ばしてるなあウィルズ君は」となのはがこぼしていた。

そんなときにティアナは、背後から魔力弾をうとうとしていた。

撃たせたくないね。僕は足のベクトルを下にして一気に加速した。

「速い！？」ティアナが驚く。「でも、行くわ速くたって！！！」ティアナがすごい数の魔力弾を打ち込んできた。

「おいおい、そりゃ、Bランクの技じゃないだろ」と突っ込みながら、冷静に魔力弾のベクトルを逆にした。もちろん撃った本人に飛んでいくわけで、

「うそ！？」とティアナは自分の撃った技で自滅した。まあ、一応

僕が手を下してるから、自滅ではないんだけど、この際どうでもいい。

「ウィルズさんすごいです。」とエリキャラが絶賛。

「まだまだだよ。ちゃんと見てて。」となのはが答える。

「後はスバルか。近接同士、いつちょやりますか？」

「はい！お願いします！」

「うおおおお！！！」とスバルはウィングロード上を走ってくる。

迎え撃ちますか

「神・列！」そういうと、すごい速さで、僕はトリシューラを動かした。

ガキン！ガキン！

と何度も打ち合っている。

「これについてくるとはなかなかだな。」と僕はつかの間の余裕を見せた。

「いえ」とスバルが必死に打ち合っている。

「さて、時間もかなりたったし、×にすつか？」

「え？」とスバルが驚いた顔をする。

「悠久なる凍土・・・凍てつく棺の地にて・・・永遠の眠りを与えよ・・・」そうすると、あたり一面に雪が舞い、地面が凍っていく。「あれ？なにこれ？」ティアナが目を覚まして困惑する。

「ちょっとウィルズ君、ストップ！」となのはが叫ぶが聞こえない。いや、聞こえない振り。

「あわわわ」とスバルは逃げ場を失っている。

「凍てつけ！！！」

「エターナルコフィン」

「あ」となのはがいった瞬間。あたり一面が氷で埋め尽くされた。

その後、

「だからストップって言ったのに。」となのはにお叱りを受けた。

氷は自分で溶かしました。

「ウィルズさん、すいませんでした。」とティアナが素直に謝った。

「いや、別に気にしてないから。」と僕は答えた。

「ウィルズさんすごいです。」と他の3人からはいわれた。

「あの、さっきのあの力は何ですか？私の魔力弾をはじき返して。」

「あれ？ああ、あれは、魔力弾のベクトルを逆にしただけだよ。」

「ベクトルを逆に？」

「そう、僕にはベクトル操作の力がある。だからその気になれば、人の血液を逆流することだってできる。まあ、やらないけど」

「そ、そうなんですか。」とティアナは苦笑いした。

「さて、今日の訓練はここまで、みんな、また明日がんばろうね」となのはが解散の合図をした。

FW「ありがとうございました！！！」

「今日は、はやてちゃんもいないけど、これからどうする？」

「うーん、まずは食堂で昼飯かな、なのはさんも行くんだったら、先行ってて。僕はやることあるから。」

「ふーん分かったよ。じゃあ、先行ってるね。」となのはは手を振って食堂のほうへ走っていった。

「さて、そろそろ出てきて良いんじゃないかな？怪しい不審者さん？」

「なにおー、不審者とは何事だい！私は不審者じゃないーい。」

「元気な不審者だなおい。」

「だから不審者じゃないってば！」

「勝手に人の思考を読むな！」

「マスター、やりますか？」とトリシューラが割って入った。

「ああ、怪しいやつには事情をきかねえとな。」そういつて僕はトリシューラを構えた。

「ほんとにいいすつか？私とやっても勝てませんよ？」

「そうだな、ちゃっかりエターナルコフィンもよけてたしな。だけどね、あれだけが僕の取り柄じゃないんだ。」

「そうっすか、じゃあやりますか？後悔してもしらないっすよ？」

「そのせりふそっくりそのまま返してやるよ！」

8年ぶりに僕は、戦闘機人と戦うことになった。

六課初日ゝ意外と個性きついね、このメンバーはゝ（後書き）

はい、平和とっていただけ、最後はちよつと・・・。

でも、いいじゃないですか。

これからは、STSを軸に原作とはちよつと変わった進み方をする
かもしれません。

次回は、ついに、ナンバーズの一人と戦います。お楽しみに！

決戦？ナンバーズの实力とは・・・（前書き）

ナンバーズとの初戦闘！がんばって書きたいと思います。

決戦？ナンバーズの實力とは・・・

side〜ウィルズ〜

「トリシューラ、ツイン！」

「ツインブレードフォーム」

「お前、6番ってことはセインか？」

「なんで、私の名前がわかるっすか？」

「いやあ、適当に言っただけ、当たってたか」なんていつてるけど、原作知ってます。なんていえねえ。

「それにしても、なんかこう、目のやり場に困る服装してんだな」

「な／＼なにいつてんすか／＼」とセインは顔を赤らめた。

「どうした？」

「セクハラっす／＼」なおも赤面しながら、反論してきた。

「そんなつもりじゃない。ただ、美人はなに着ても似合うんだなって言おうと思ったただけなのに。」

と僕は、笑顔で返した。

「うう／＼」とセインはなにやら唸っている。

「男の人にほめられたの初めてっす／＼」とセインは心の中で思っていた。

「まあ、こんな世間話はここまでで、そろそろ始めますか。」

「そそそつつすよ」とセインはあわてて言い返してきた。

「やる気十分だねそれじゃあ・・・広域結界！」六課の隊舎前が境界に包まれる。

「これだと思う存分やれる。」と僕は言いながら、チャージャーの電源をオンにした。

「ほら、おきろー、ウィルス、お前の出番だあ」

「あん？敵さんか？しかたねえな。」照れがくしっすかウィルスさん。

「んじゃあ、あの女に見せ付けてやらねいとな、本物の超兵ってやつをな！！！」とウィルス

「いくぞ！セイン、30分で終わらせる」

「やれるもんならやってみな！」

セインも本気が

ウィ・セ「はああああ！！！！」二人の死闘は始まった。

side～ウィルズ～out

side～六課メンバー隊長たち～

なのは「ウィルズ君、ちょっとやる必要があるっていったけど、何なんだろう?」

フェイト「あつなのは、お疲れ、ウィルズ君が今日から転属って言うんだけど、どこ?」

なのは「えっとね、」と今まであったことを話した

フェイト「やることね、転属初日に仕事なわけないから、まさか! ? 敵?」

なのは「そんなわけないよ」

フェイト「そうだね、いくら不幸体質のウィルズ君だって、初日に敵と戦うなんて・・・」

な・フェ「! ?、結界」

なのは「まさかね」

フェイト「うん、まさか」と二人は苦笑いしてるのが精一杯だった。

side～六課隊長陣～out

s i d e 〽 セイン 〽

「おいおい、逃げてばかりじゃなくて、もっと攻めないと、ほら」
目の前の男がそういうと

「ぐっ！」目の前から砲撃が

「これじゃあ、こっちが不利っす。ISディープダイバー」

「ほほう、それがさっきエターナルコフィンを避けた方法か」

「これであいつの後ろに回りこんで首を」とセインは地面を移動しながら、ウィルズの後ろに出た。

「これで!!!」

s i d e 〽 セイン 〽 o u t

s i d e 〽 ウィルズ 〽

「これで!!!」

「避けられねえな。なあ？」

「そうだな、だが、避けて見せるオオオ!!!」

「な!？」かわした、確実に

「さて、今度はこっちの番だな。」

「いくぞ！カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」カシャンカシャンとこ気味のいい音を鳴らしながら僕はカートリッジを2発ロードした。

「ちょっと、いたいの我慢しろよ・・・」そういつとあたり一面に魔力が浮かんできた

「こんなにバラまいたか」その魔力は一転に集中していく

「集束砲・・・だけど、IS、なに？バインド？」

「こっちはあまり時間がないんでね、一気に終わらせてもらう。」

「いくぜ！、これが俺たちの全力全開！」

「エターナル・ブレイカー」

ドゴオオン！！！！直後一帯に大きな音が響き渡った・・・。

決戦？ナンバーズの實力とは・・・（後書き）

セイン戦終了です。

今回は、セイン戦後日談でも書きたいと思います。

戦いの後・・・。(前書き)

セイン戦の後日談です。ちょっと短いです。

戦いの後・・・。

「はあはあはあ・・・大丈夫か？セイン」

返事がない・・・やりすぎちゃったかな。

「おい大丈夫か？」肩で息をしながら呼んでみる。結界なんてもう壊れてるから、外に丸聞こえだ。

「マスター、気絶してます。」

「あちゃあ〜やっぱりやりすぎたみたいだね。」

うん、やりすぎだったのは認めよう。威力的には、なのはのSLBと同等ぐらいだもん。

「よつと、セインをちよつと医務室につれてくは」そういいながら僕はセインを抱え（まあ、持ち方は仕方がなくお姫様抱っこになっちゃったけど）、医務室まで移動する。

「あれ？つてええええ！？」セインが目を覚ましたらしいな

「ちよつと、これどういうこと！？／＼」となにやら顔を赤らめていた。

「ああ、ちよつと僕もやりすぎたからね、お詫びと云ったら何だけど、ちよつと手当てするよ。」

「だからって、なんでこの抱え方／＼」ん？最後のほうがちよつと

聞こえなかった。

「え？なんだって？」と聞き返すと

「なんでもない！／＼」と真つ赤な顔で言い返された。

うゝんどうしたんだろ。

「マスターも罪な男ですね」

「ん？何か言った？」

「いえいえ何も。」

そうこうしてるうちに医務室についた。

「ちょっとそこに座っててな。」

とセインを座らせ、シャルル先生を呼びにいった。

「シャルル先生ーちょっと手当てして欲しい子がいるんですけど。」

「はいはーいちょっと待ってね。」

「わお、これまたすごい子ね」うん、そうだよ、だって、ナンバ
ーズのスーツのままだもん。

「あゝその、よろしくお願いします。」

「それよりもどうしたの？体に別状はないけど、かなり傷ついてる

みたいだけど、何かあった？」

「いやゝそのゝなんといえますか、ねえ、セイン」

「えっ？いきなり私に振る？」

「もしかしてさっきの結界に関係あるのかな？」シャルさん笑顔が怖い。目が笑ってないよ。

「まあ、うそついても仕方ないですしね。そうですよ、僕とセインが戦って、ちょっとぼくがやりすぎちゃったんですよ。」

「やっぱりそうなのね、バトルマニアでも、こんなに可愛いくて、か弱い女の子を傷つけちゃだめよ？」

「いやいや、僕バトルマニアじゃないし、」そもそも、か弱くないし、めっちゃ強いから、まあ、可愛いのは認めるけどさ。

「はい、もう手当ては終わったわ、このことは、なのはさんたちに言ってもいいのかしら？」

「できれば秘密にしておきたい。そっちのほうがいいだろ？セイン」

「うん、できればそのほうがありがたい。」

「わかったわ、じゃあ、これは、私たちだけの秘密です。」まあ、結局この後なぜか隊長たち3人にばれて、お話というなの、暴力を受けたのは、また別の話。

「何で私のこと、上に言わなかったんだ？言ったらそれだけ情報が
「そこまで」え？」

僕はセインの言葉をさえぎった

「セインが何でここに来たのか、なぜ、戦闘機人なのかとか、そんなの関係ないよ、ただ、僕が報告しなくていいと思ったからしなかった。ただそれだけ。」

「でも」

「別いいよ、セインは元いた場所に帰りな、みんな待ってるんだろ？」

「うん、」

「じゃあな、またどこかで会えるといいな」と僕は微笑んだ

セインは無言で帰っていった。というか、地面に消えた。

「あの笑顔はさすがに反則だよ／＼」セインは改めて今日あったことを、考えていた。

side～セイン～

「おかえり～セインちゃん」

「クア姉、ただいま」

「どうした、元気がないぞ」

「チンク姉、今日、六課に潜入する直前に、バレてさ、そいつと戦ったんだけど、負けちゃって・・・。」

「あらあら、そんなことがあったの？だってドクター」

「セイン、その相手とは、この男ではなかったか？」

「ああ、そうそう、そいつだよ、なんかやけに優しくてさ」といいながら顔を赤くした。

「あらあら、意外とイケメンね」というよりもかわいいかしら」とクアットロ

「そうか、セイン、君は実にいい人物と接触した。今回の潜入はかなりよかったな。」とドクターは笑っている

「どうしたっすか？」と他のメンバーたちも集まってくる。

そして、その後、ウィルズ・レータという人物についての、デイスカッションが数時間続いたそうだ。

戦いの後・・・。（後書き）

ナンバーズの口調は適当です。なんとなく覚えている範囲で書きました。

次は、六課の話になります。

それでは次回へtake off

ちよつと急用（前書き）

これから、完全に原作から脱線していきます。

ちよつと急用

はやて「はあ、まあ、昨日の一件はもうええけど、これからはもうやめて欲しいわ」

なのは「そうそう、いきなり結界なんて張っちゃうんだもん」

フェイト「喧嘩なんてだめだよ。しかも、隊舎の前で」

「売られた喧嘩は買うだけだ。」そう、セインが戦闘機人だって事は隠して、ただ喧嘩したということになっている。だってこんなに早くから戦闘機人と接触したなんて言ったらこれから先どうなることやら。

はやて「何や反省できてないみたいやな。なんなら、仕事増やしたるかー」

「ごめん、僕今日は急用があるから、仕事は無理。」

なのは「急用って？」

「うん、ちよつと、無限書庫行ってくるんだよね。」

なのは「ユーノ君のどこ？」

「うん、ちよつと話したいこともあるからね。じゃ、行ってきます」と僕は逃げるように隊長室を後にした。

〈無限書庫〉

「ユーノさん、こんにちは」

「ん？ああ、久しぶりだね、ウィルズ君」かなりつかれているみたい。だって、目の下に尋常じゃないクマができてるもん。

「ユーノさん大丈夫ですか？」

「大丈夫・・・って言いたいとこだけど、正直厳しいね。」ハハと笑いながら答える

「よし、今日は仕事ありませんし、手伝いますよ。」

「いいの？じゃあ、お言葉に甘えさせていただくよ。」

それから、僕は、昨日のことや戦闘機人について、これから起こるであろう事について話しながらユーノさんの仕事を手伝った。

「戦闘機人か、それに、ゆりかごね、それを僕に言ってどうしろと？」

「はい、僕はユーノさんになのはさんのサポートを昔みたいにやっていただきたくて今日はきました。」

「昔みたいだね、でも、今のなのはなら一人で大丈夫だよ。」

「一人でも大丈夫なのは事実です。でも、何でも、一人で抱え込ませるよりも、やっぱり誰かが助けるべきでしょう。」

「だったら君が助けてもいいでしょう？」

「だめです。なのははユーノさんが助けるべきです。いや、助けなければいけません。」

「なんで、君は僕にこだわる。オーバーSランクのなのははAランクの僕の助けは要らないよ。」

「確かに、ユーノさんは、攻撃では助けにならないでしょう。でも、ユーノさんの結界はすごいです。」

「防御魔法も、デバイスなしであれだけの強度はすごいです。」だって、僕の砲撃でびくともしないもん。

「でも・・・」

「今すぐとは言いません。でも、考えておいてください。それに」

「それに？」

「なのはさんに振り向いて欲しかったら、久しぶりに男らしいとこ見せないと。」

「結局そこ！？」なんて会話をしながら、仕事は終わった。

「今日はありがとう。助かったよ。」

「いえいえ、今日いったこと、考えておいてくださいね」

「うん、考えてみるよ」とユーノさんは微笑んだ。

「それじゃあ、ぼくは六課に戻りますんで。」

「うん、またね」と僕はユーのさんとわかれた。ちなみに、この後ユーノさんは久しぶりの睡眠を手に入れたのはまた別の話。

帰ったら、ちょうど、フォワードたちが任務から帰ってきたところだった。へえ、今日がファーストアラートか。

「よう、おつかれさん」とぼくはフォワードたちに声をかけた。

「はい!」とみんな元気に答えてくれた。すると

「ウィルズ君? 何処行ってたのかな?」目が笑ってないっす、なのはさん。

「ちょっと、ユーノさんの手伝いをね。」

「ユーノ君?」ホッ、なのはの殺気が消えた。これも、ユーノさんパワー

「うん、最近仕事が多すぎて寝てなかったんだって、だから、手伝ってきたんだよ。」

「そうなんだ、なら、仕方ないね」となのはが言った。よかった殺されない

「今なんかよくないこと考えてた?」

「ナンノコトデショウカ」女って何でこんなに感じがいいの？

「まあ、フォワード人もがんばったんだろ？だったらいいじゃないか」

「うん、まあよかったはよかったんだけどね、新型のガジェットが出たり、いろいろあったんだよ」

となのはが口を尖らせた。知るかそんなこと。

「ああ、疲れたからもう寝るは、後、FW陣ちゃんと休ませてやれよ、じゃあな」

「わかってるよー」後ろでなんか言ってるけど気にしない。

く自室く

もうファーストアラートか、早いな。

ってことは、もう少しで魔王が……。やべえ回避してえ。
なんか眠い……。もう寝よ。

ちよつと急用（後書き）

はい、ユーノ参戦決定！

いづころかはまだ正確には決めてませんが、参戦させます。

だって、どんどん扱いがひどくなってかわいそうだから・・・。

魔王阻止ならず・・・。(前書き)

ティアの暴走となのはさんブチ切れシーンを書こうと思います。

魔王阻止ならず・・・。

なんかかんやで、ホテル・アグスタ・・・。やばい魔王回避のためにいろいろやったが無理っぽい・・・。

ごめんティアナ・・・。

さて、気を取り直していこう。今から、ホテル・アグスタで行われるオークションの警備が任務だ。

「はあ、」

「どうしたの？」となのはが心配そうに聞いてくる。あんたのせいだよとは口が裂けてもいえない。だって殺されるかもしれないじゃん？

「いや、最近新人たちの成長がすごくて・・・。追い越されそう。」そう、これは事実。正直ちよつとやばい。個人個人ではまだまだだが、4人になるといきなり強くなるからビックリだ。

「そうだよね、スバルたち最近ほんとに強くなってるよね。」ちなみに、今はオークション会場内。

FWたちは、外の警備だ。もう少ししたら、ユーの君登場かな？そして、ルーテシアとガリユーもか。

ヴィータたちも見回り。

フェイトさんも近くにいろし、はやてさんは、今頃アコース査察官

とおしゃべりかな？とユーノ君登場。

そろそろか、

「僕は外の見回りにいつてくるよ。」

「え？あ、うん」

「さて、ティアとスバルは何処だっけ？」

ドガンドガン！！！！お？あっちのほうから爆発が。ああ、ザフィーラか、がんばってるね。

てことは、そろそろマジでミスショットが近い。

SideFW陣

エリオ「召喚魔方陣？」

スバル「こんなこともできるんだ。」

キヤロ「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるのです。」

ティア「なんでもいいわ、迎撃いくわよ！」

ス・エ・キャ「おう！」

ティア「今までと同じだ、証明すればいい、自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいつだってやってきた。」ティアの足元にオレンジ色の魔方陣が広がる。

シャル「防衛ラインもう少し持ちこたえててね。」

スバル「はい」

シャル「ヴィータ副隊長がすぐ戻ってくるから。」

ティア「守ってばっかじゃ行き詰ります。ちゃんと全機落します。」

シャル「ティアナ大丈夫？無茶しないで！」

ティア「大丈夫です。毎日練習してきてるんですから。エリオ！センターに下がって、あたしとスバルの2トップで行く！」

エリオ「はい」

ティア「スバル！クロスシフトAいくわよ！」

スバル「おう！」

ティア「証明するんだ・・・！特別な才能や、すごい魔力がなくなつて！一流の隊長たちの部隊でだって、どんな危険な戦いだって！あたしは、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ちぬけるんだつて！」

シャル「ティアナ、4発ロードなんて無茶だよ。それじゃ、ティ

アナもクロスミラージューも」

ティア「撃てます」

クロス「yes!」

ティア「クロスファイヤー・・・シュート!!!!・・・うあああ!!」

スバル「うあ!?(あ、当たる・・・!)」とスバルは目をつぶった。そのとき!

ドカン!

スバル「ヴィータ副隊長!それに、ウィルズさん!」

ヴィータ「ティアナ!こんバカ!!!!無茶やった上に見方撃ってどうすんだ!!!!」

「そつだな、無茶やってこれじゃあ世話ないな・・・。」

スバル「ヴィータ副隊長、今のはその、コンビネーションの一種で・・・。」

ヴィータ「ふざけたこ!直撃コースだよ!今の・・・!」

スバル「違っんです。今のは私がいけないんです!」

「もういい!後は俺たち二人でやる!お前らはちょっと頭冷やしてこい!」

ティア「あ、ああ・・・あ」呆然としている。そりゃそうだろうな・・・。

スバル「ティアいこ」

（sideFA陣out）

「ヴィータ、厄介なことになったな。」

「そうだな、でも、まずはここの後かたづけをしねえと。」

「そうだな」

それから、数時間後・・・。

なのは「えっと、報告は以上かな。現場検証は調査班がやってくれるけど、みんなも協力してあげてね、しばらくして何も無いようなら撤退だから。」

ス・エ・キャ「はい!!」

なのは「で、ティアナはちょっと私とお散歩しようか?」

ティアナ「はい・・・。」

なのは「失敗しちゃったみたいだね。」

ティア「すいません、一発・・・反れちゃって。」

なのは「私は現場にいなかったし、ヴィータ副隊長とウィルズ君にしかられて、もうちゃんと反省してると思うから。改めてしかつたりはしないけど・・・、ティアナは時々少し一生懸命すぎるんだよね。それでちよつと、やんちゃしちゃうんだ。でもね、ティアナは一人で戦ってるんじゃないんだよ。集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右すべてが見方なんだから。その意味と今回のミスの理由をちゃんと考えて、同じことを二度と繰り返さないって、約束できる？」

ティア「はい。」

なのは「なら、私からはそれだけ、約束したからね。」そう、これで終わっていたと思っていた。少なくともなのはこれで今回の問題は解決したと思っていた。でも、問題は解決していなかった・・・。

数日後・・・。

ティアナは毎朝早くから、自主練をはじめ、正式な訓練の後、日が暮れるまで自主練をしていた。

「おい、そんなにやって、大丈夫か？」

「大丈夫です、これだけやらないとうまくなりません。私、凡人なもんで！」

「凡人か、少なくとも、今のティアナは凡人じゃないと思うぜ？僕なんてさ、まあいいや、自分の過去語ったって、しかたねえもんな、でも、ちゃんと、なのはさんと話とくんだぜ、お互い理解のうえで

なら、俺は応援するけどな。」

「ありがとうございます。近いうちに話してみます。」って、そば向いたままかよ。こりゃ、なのはにもいっとかねえと・・・。

「なのは、いまいいか？」

「うん、なにかな？」

「いや、ティアナのことなんだけどよ、どうやら、エリート部隊の中で自分を凡人だと思ってるみたいなんだわ、」

「そんなことないよ！」

「いや、そりゃわかってるで、つか僕に怒るな。だから、一度話してみりゃどうだ？その、無茶の結果とかさ。近いうちに話してやれば？あいつ、結構頑固だからさ。」

「うん、そうしてみるよ・・・。」

「じゃ、頼んだぜ」

それから数日後、二人はまったく話した気配もなく、模擬戦を迎えた。

「やべえな、コリヤ俺のミスだな。」

「そうですね、このへたれ！」

「ひでえ、自分のマスターに言う？まあ、自覚はあるよ、もう少し

ちゃんとしてやりや、もつとうまくいったはずだ。だから、この問題は、俺が介入する。」

「おお、マスターが久々に俺といった！こうなったら本気でいいですね？マスター」

「ああ」そういつと、俺とトリシューラは模擬戦の会場に行った。

行くとちょうど、スバルが突撃し、ティアナがなのはに刃物を向けて飛んでいるところだった。

なんか、タイミングよすぎだね。われながら怖いわ。（2発目で介入いいな！）（はい、マスター。）

なのは「レイジングハートモードリリース……。」はじまる……。

レイ「all right」

なのは「おかしいな、二人とも、どうしちゃったのかな？」

スバル「あっ」

ティア「えっ？」

なのは「がんばってるのは分かるんだけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……。練習のときだけ言うこと聞いて、本番でこういう危険な無茶するなら、練習の意味ないじゃない……。」

ティアがハッと息を呑む。

なのは「ちゃんとさ、練習どおりやろうよ。ねえ、私のやってる」と、私のやってる訓練、そんなに間違ってる……？」

ティア「くっ！私は！もう誰も傷つけないから！楽したくないから！」

スバル「ティア……。」

ティア「だから……！強くなりたいんです……！」と泣き叫ぶように、懇願するようにいった。

なのは「少し、頭冷やそうか……。」

スバルはあつと息を呑む。

なのは「クロスファイヤー……。」

ティア「うああああ……！ファントムブレ「シュート……。」はっ！」

ドカン……！と爆煙が広がる。

スバル「ティア！はっ！バインド」

なのは「じつとしてよく見てなさい……！」「やっぱりやる気かよ……！」

スバル「なのはさん……！」

なのは「模擬戦はここまで今日は「ちょっと待った!」え?」

その直後、クロスファイヤーがそのままなのはにかえってきた。

「くっ!」となのはラウンドシールドで防ぐ。

フェイト「あれは。」

ヴィータ「あいつ、いつの間に」

なのは「なにをするのかな、ウィルズ君」

「そりゃこっちのせりふだ!なにやってんだよ!一発目はいいとしてだ!二発目入らないだろ!おまえは、何処の何様のつもりだ!!」

なのは「ウィルズ君、言っていないことと悪いことがあるよ。ウィルズ君も頭冷やそうか・・・!」

「オイウィルス!行くぞ!」しゃあねえな・・・。あの女に見せ付けてやるうぜ!本物の力ってやつを!!」「ベクトル操作スイッチオン!...来い!なのは!今からお前を倒す!」

「いいよ、やれるモンならやってみるといいよ。デイベインバスター!...!」はい!

だけど、これなら・・・ドカン!!!!「言った割には楽だったよねウィルズ君?」

「楽だねえこりゃ、銀球でっばうより痛くネエや!」傷が回復する。

「くっ！」

「アクセルシューター！！」「へっ！」ベクトルで方向を逆にする。
「ならこれは？」

「リミットブレイク！」エクシードモードになった。オイオイまさか本気？

「エクセリオン・・・バスター！！！」

みんな「あっ！」当たったという前に声がした。

「それが本気か、なのは。じゃあ、これからは、こちらのターンだね。」

「トリシューラ・・・ツインソード・・・。」

「オーライ・・・。」槍は双剣へと変わった。

「どうするつもりかな」

「まあ、見てなつて、一瞬だから・・・！」

「はああ！！」と僕はトリシューラを構え一気になのはにちかずいた、そのとき何発も魔力弾が飛んできたが、すべてベクトル操作で反射した。

「ティアナだつてな！！！！好きでああなつたわけじゃねえんだよ！！！！お前に分かるか？魔導師なり立てから、エース、エースって言われてよ！！！！俺たちの気持ちがあわかんのか？そりやお前もかな

り苦勞してるよな。だけど名、お前は自分よりも弱い人の立場を分かってるのか！！！口で言わねえとわかんないことだってたくさんあるんだよ！！それを、教導だけで見せるのには限界だってあるんだよ！！！！どうして話さなかった、自分の過去を、無茶すると危ないって何で言わなかった！！！！その一言でいいだろ！！！！おい答えろよ！！！！答えるよーーーー！！！！」

「くはあ！？」なのはは懐に入られて、なすすべもなく、僕のゼロ距離の攻撃で終わるはずだった……。そう、はずだった……。

「エターナルウウウ！！！！スラアアッシュ！！！！」

ドカン！！！！と爆煙が辺りを包む。しかし相手に当たった手ごたえはない。なぜだ？シールドは間に合わない。

フェイト「なのは……。」「と心配そうに呟く。

ヴィータ「あいつ、やりすぎだろ」といった

新人たちはあまりの僕の豹変振りに、声が出ないらしい……。だとしたら誰だ？まさか！？

「そこまでしたらどうだい？ふたりとも」

「ゆ、ユーノさん！」

「ユ、ユーノ君……。」「そう、ユーノさんがなのはをかばったのだ、確かにあの人の防御魔法なら簡単には敗れない。

「二人とも少し落ち着こうよ。」

「でも、何でユーノ君が？」

「僕の話はいいから、ほら、君たち、隊舎へ戻ろう。とユーノさんは新人たちに声をかけ、みんなと一緒に隊舎へ戻っていった

俺、なんか出てきて損した？そのようですねマスター。

その後、アラートがなり、ティアナは待機をはずされ、なのはとフエイトさんとヴィータがガジェットの新型の撃退に向かった。

そのときのやり取りは、また次回で書こう。

魔王阻止ならず・・・。（後書き）

はい、魔王編終了ちょっと手前。

本当はもっと早く更新の予定が、なかなか、案がまとまらなくて、遅くなってしまいました。楽しみにしてた方、大変申し訳ありません。

今回は、なのはさんの過去についてです。

それでは次回へ t a k e o f f

ぶつかり合った後（前書き）

ユ一ノ乱入から後のことを書きたいと思います。

ぶつかり合った後

今日は、あの後のことを話そう。あの後というのは、なのはと僕が戦い、ユーノさんの乱入によって終結した戦いのことだ。

「それで、二人ともどうして戦ったのかな？今日は新人たちの模擬戦のはずだったでしょう？」とユーノさんが聞いてきた。ちなみに今いる場所は、六課のロビーである。

「それは、ティアナが無茶して、それで、なのはが怒って、魔法当てようとしたから、僕が乱入したんです。」と僕がいった。

「えっと、ティアナってあの、オレンジ色の髪をした子かな？」とユーノさんがいった。

「はい、」とスバルが言った。ちなみにここには、僕となのは、スバルそして、ユーノさんがいるというわけだ。

「ふうん、あの子か、それで、なのははどうして怒ったのかな？」とにこやかに聞く。

「それは、その、無茶はよくないから。」となのはが答えた。

「なのはが言いたいことはよくわかるよ。でも、そのことをちゃんと話した？」

「うつ・・・。」となのはが痛いところをつかれた顔をする。

「なのは、人はね、万能じゃないんだよ。だからね、私の背中を見

て感じなさいだけじゃだめなときもあるんだよ。時には口で話さなきゃいけないこともあるんだよ。それを僕たちはいろいろなことを通して学んだはずだろ？」

「うん……。そうだよな……。」となのはが落ち込んでいる。そのとき

キューーン、キューーン、キューーンとアラート音が鳴り響いた。

「おっと、緊急事態みたいだね。」とユーノさん

「ごめん、ちょっと行ってくる。」となのはと僕は集合場所にいった。

どうやら、今回のガジェットは新型らしい。こちらの戦力を測るつもりか。

そして、ヘリの離陸上にて、

「今回の出撃は、私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人、」

「みんなはロビーで出動待機ね。」とフェイト

「そっちの指揮はシグナムだ」とヴィータ

「あ、それからティアナ、ティアナ……。出動待機からはずれとこ
うか」

「そのほうがいいな、そうしとけ」

「今夜は、魔力も体調もベストじゃないだろうし、「いうこと聞かないやつは、使えないってことですか・・・？」ん？自分で言うて分からない？それ当たり前のことだよ「現場の支持や命令は聞いてます。教導だってちゃんとサボらずやってます。それ以外の場所の努力だって教えられたとおりじゃないとだめなんですか？私は、なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャラみたいないなスキルもない。少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなれないじゃないですか！」とそ
のとき

誰かが、ティアナを殴った。

「オイ、シグナム」とヴィータがいった。

「いや、私ではない。確かに私は殴ろうと思ったが、私ではない」とシグナムが言った。

だったら誰だ？

「どうして・・・そんなことを言うんだい。」

「ユーノ君！？」とフェイトとなのはが驚いている。そうだろう、普段はこういうことをしない人だからこそだ。

「なのは、行つて。」

「でも、」

「いいから、こっちは引き受けるから。」

「うん、わかった。」そういうと、なのはたちはヴァイスさんのへりで現場に向かって出発した。

「ユーノさん、殴らなくても……。」と僕が言うといつになく厳しい目でユーノさんはいった。

「あの、さっきのティアの物言いとが、それを止められなかった私は確かにだめだと思います。だけど、自分なりに強くなろうと努力するのとか！きつい状況のときなんとかしようとするのは、そんなにいけないことなんでしょう！自分なりの努力とかそういうのもやっちゃいけないんでしょうか！」

「君たちは知らなさ過ぎる！本当の戦い。本当の無茶。それを知らないで無茶したら、きつと後悔する……。ウィルズ君！分かるでしょう君なら、あの場に居合わせた君なら！どうして言わなかった！どうして……。！」そう、この問題はなのはだけの責任じゃなく、僕の責任でもあるのだ。

「ティアナっていったね。君は何も知らない。生まれてからミッドにずっといた君たちは知らないかもしれないけど、なのはたちは好きで魔導師になったんじゃない。」

「え？それって……。どういう。」とティアナが混乱している。

「シャーリー、なのはの過去のデータあるよね？」

「はい、ありますが、いいんですか？」

「後で僕がちゃんと謝っとくよ。」とユーノさんが言った。

それから、みんなでロビーに集まって

「これから、なのはたちの過去を見せるよ。これが・・・、僕やウィルズ君が生きてきた戦いなんだ・・・。」

「昔ね、一人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった。ただ、友達と一緒に学校に行って、家族と仲良くして、普通にそういう生活を送るはずだった、だけど、事件が起こった」

「それは、僕が見つけたロストロギア、ジュエルシードが原因なんだ・・・。」

「魔法学校に通っていたわけじゃない、特別な能力もない、偶然魔法に出会った、ただ魔力が多いたった九歳の女の子が、魔法と出会ってわずか数ヶ月に命がけの実践を繰り返した。」

「これ、フェイトさん・・・？」とエリオ

「この頃のフェイトさんにはいろいろな家庭の事情があつてね。なのはさんと対立してたの。」

「この事件の中心人物は、テストロッサの母、プレシアテストロッサ。その名をとって、プレシア事件。あるいは、ジュエルシード事件と呼ばれている。」

「集束砲？こんな大きな！」とエリオ

「九歳の女の子が。」とスバル

「ただでさえ、大魔力砲は体に負担がかかるのに。」とキャラ

「その後もな、あまりときもおかず、戦いが続いた。」

「私たちが深くかわった、闇の書事件。」とシグナムとシャマル
がいった。

「襲撃戦での撃墜未遂と・・・敗北。それに打ち勝つために選んだ
のが、当時まだ安全性がなかったカートリッジシステム。体への負
担を無視して、自らの限界を超えた出力を引き出すフルドライブ。
エクセリオンモード。」

「誰かを助けるため、自分の思いを貫くための無茶を、なのはは続
けた」とユーノさんが悲しそうにいった。

「でも、そんなことを続けて、体が無事ですむわけがなかった・・・
。事故が起きたのは、入局二年目の冬。異世界での操作任務の帰り、
ヴィータちゃんや部隊の仲間たちと出かけた場所。未確認の敵・・・
いつものなのはちゃんならみんなを守って落とせば済むの敵、でも、
たまっていた疲労、続けてきた無茶への反動が、少しだけなのはち
ゃんを鈍らせたのね。その少しがなのはちゃんを落とした。」

「これって！？」とエリオが言う。

「そう、ここで、なのはを助けたのが僕だ。この頃はまだ、なのは

たちと面識がなくてね。このとき初めて一緒に任務をしたんだけど、突然の事態で……。」

「でも、これって!？」とスバルが驚いている。

「そう、これで、僕は瀕死の重傷を負った。だけど、僕にも、引けない理由があってね、なのはのために、部隊のために、戦った。今とはちょっと違うように見えるだろ？これが僕の本気の片鱗。僕の中にはもう一人の人格がいてね、そいつは、反射をつかさどっている。そして僕は思考。この二人が一緒になったら……。ってばくもまだちゃんと試してないんだけどね。」

「ウィルズ君のおかげで、なのはは助かった。でも、その後がもつとつらいんだ」とユーノ君。

その後、リハビリの映像やら、僕たちの戦いやらを見て、新人たちは泣いていた。

自分たちは魔法に甘えていた。この世界が当たり前だと思っていた。だが、現実違った。

僕は異世界で経験している。戦闘機人との初戦闘を……。この映像はあまりにグロいため、ところどころモザイクがかけられていた。このときの僕はちょっと理性を失っていたからね。そんなこんなですべてが終わって。

「私、なのはさんが帰ってきたらちゃんと話してみます。」

「そうしてあげて、なのはも喜ぶから。」とユーノ君がいった。

「ところで、ユーノさん、司書長の仕事いいんですか？」

「ああ、別に大丈夫だよ、アルフたちががんばってるから。」

「あの〜ところでユーノさんって何をやってる方なんですか？」とスバル

「えっと、一応無限書庫の司書長と考古学者をやってます。」

「えええ！！！」と新人たち驚きすぎ。

「でも、あの魔法は。」

「ああ、ユーノさんの防御魔法はすごいからね、ユーノさん結界魔導師でもあるんだ。」

「Aランクだけどね。」と謙遜してる。

「ティアナ、僕は別にすごい魔力があつたわけでもないし、レアスキルもなかった、でも、守りたい人がいると、自然と強くなるからさ、そんなにあせらなくてもいいんじゃないかな」とユーノさんが言った。

「はい」とティアナが答えた。

ぶつかり合った後（後書き）

今回はここまで、次回は、仲直り編。

それでは次回へtake off

仲直り編（前書き）

更新遅れてすいません。

それでは仲直り編始まります。

仲直り編

「はあ、なんか面目ないっす。」と僕が謝ると

「いいよ別に、僕も君に悪気がなかったことぐらい分かってるから。」

「そういつてくれると助かります」

「それよりすんません。なのは傷つけちゃって……。」

「別にいいよ、この件はなのはも悪いしね。」

その頃、なのはたちは原作どおり、ティアナと会話し、そのほかのメンバーが覗くということをやっていた。そして、それがティアナにばれて、追いかけられるといういつもどおりのバカ騒ぎを済ませて、今、ユーノとなのはは話していた。

「その、ごめんねユーノ君。」

「いいよ、さつきウィルズ君にも謝られたしね。それでさ、この前ウィルズ君にいろいろ聞いたんだ」

「ウィルズ君から？」それからユーノはいろいろ話した。六課が壊滅すること、地上本部が汚職をしていること、それから、なのはが苦しむこと

「そっか……。私はまた戦うんだね、覚悟はあるんだよ。そのために六課にはいったんだから。」

「なのは」

「なに？」

「僕はいつ、何処にいても、なのはを守るよ」それだけ、と言って
ユーノは仕事へと帰っていった。

s i d eなのは

「僕は、いつ、何処にいても、なのはを守るよ」それだけ、とユー
ノ君は言ってしまった。

「え・・・／＼／」はじめはなにを言われているのかわからなか
った。これって告白？

この気持ちは何？わからないよ。

s i d eなのはo u t

s i d eユーノ

「言っちゃったな」と呟いた。出会ってからずっと思っていた気持
ち。あれは、告白に近い言葉だった。

「いまさただけと恥ずかし・・・／＼／」と顔を赤くしてる自分が
いた。そのとき

「どうしたんすか？ユーノさん」とウィルズ君が前からやってきた。

「ああその、」と今言ったことを話した

「やったじゃないですか。返事はどうあれ気持ちは伝わったと思いますよ。」

「でも、なのは鈍感だから。」と苦笑いした

「おっと僕は無限図書に戻らないと、アルフが心配だ。」

「はい、お疲れ様でした。それと、ありがとうございました。」

「うん、いいよ、おかげで勇気が出せた。」

「それではまた」

「うん、またね」そういうと僕たちは別々の道に進んだ。

sideユーノウト

「はあ、ついにユーノさんやったんだな。」

「そうですね、へたれのあなたとは違います。天と地ほどの差です」

「そこまで言うことないんじゃない!？」

「まあ、これで二人は付き合うかもしれないんだよな。」

なんていいながら考えた。今まわりにそんな相手になりそうな人はいるか。

「いないよな」そう結論づける。

「とにかくユーノさんにはがんばって欲しいな」

隊舎に向かっていると、前からティアナが来た。

「あの、今日はありがとうございました。」

「いや、別にいいよ、僕も暴走しちゃったしね。」と苦笑い

「それでその・・・」

「なのはさんと仲直りできた？」

「はい、おかげさまで、それでユーノさんは」

「もう帰ったよ。司書長の仕事って結構大変なんだよ。」

「そうなんですか、まだお礼言っていなかったのに。」とティアナは申し訳なさそうにしている。

「んじゃ、僕は寝るね。おやすみ」

「はい・・・おやすみなさい」そういうと、僕は隊舎に向かっていった。

ちょっと原作と変わってきてるけど、いいよね。

僕はまだこのとき知らなかった、今この瞬間、とんでもないことが起ころうとしていたことを

side???

「準備オツケー」

「それじゃあ、作戦開始！目標、機動六課」

仲直り編（後書き）

今回は男らしいユーノ君&新しいストーリーへの予告？見たいなところ。

早い内に次の更新はしたいと思います。

次回〰️潜入！機動六課〰️h t a k e o f f

潜入！機動六課（前書き）

はい、早くも新組織が登場です。

それでは、守る戦いはじまります

潜入！機動六課

ドゴン！！！！という音で僕は目覚めた。そして、目の前に広がっていた光景は地獄だった

六課の隊舎に攻撃している集団がある。なんだ？ナンバーズではない。それに、これは！！！！

side ナンバーズ

「何だこれは、予定と違うぞ！」とトーレが言った。それもそのはず、自分が仕掛ける前に、六課の隊舎がもえているからである。

「いつたいなにが起こっている」とトーレと他のナンバーズたちは呆然と立ちつくした。

side ナンバーズ out

side 六課

「何や、なにがおきとるん。」とはやてが聞いた。

「はやてちゃん、なにが起きてるの？」となのはがきいてきた。

「わからん、私にもさっぱりや、スカリエッティでもない、別の何かや。」

その頃外では

「スバル、行くわよ！」

「おう！」と二人は戦っていた。

ったくなんなのよいつら！なんかわかんないけど、あいつらも魔導師かしら

「ティアア！！！」え？

私は振り向いたそこにはトラックのようなものが飛んできていた。

ああ、もうためだ・・・と目をつぶった。しかし、痛みがない恐る恐る目を開けると

「はあ、なんとか間に合ったな。」とトラックを一薙ぎで断った男がいた。

「大丈夫かティアナ。」

「はい、はい、」とティアナは泣きそうだった。よっぽど怖かったのだろう。

にしても、何でこいつらかね、だってそうだろ？おかしいじゃないか。見方のはずだよ？

そう、六課を襲撃した敵は「管理局」（見た目はだ）だ

「なぜこんなことをする。」そう聞いてみた。

「あの方のためだ。」とフードをかぶった男が答えた。

だが、おかしい、管理局の魔法にはちょっと違う。だがそんなことにかまってはられない。

「お前には聞きたいことは山ほどある。だから、お前を逮捕する。」

「ほう、やってみるがいい」

そして、僕と男の戦いは始まった。

男の名はフルネームは分らないが「クリス」らしい

仲間のやつがそう呼んでいた。

「行くぞトリシューラ！」

<オツケー相棒！> ホントキャラ変わったよなお前と苦笑しながら男に向かって突き進んだ。

「神・・・列！」僕は目にも留まらぬ速さで槍を振るった、だが、

「おそいな」すでに男が後ろに回りこみ、

「天覇激震」としずかにいうと、僕に向かって拳を叩き込んだ。

「くそおお！！！！」といいながら、トリシューラを向け、プロテクションを張るが・・・それはあっさり砕けた

「な・・・に」と呟いたそして、僕は負けた・・・。トリシューラは先ほどの一撃で真つ二つに折れ。

僕自身も重傷を負った。

「ふむ、この程度か。ならば続きと参ろう。」そういつと、男は六課に向かつていった

「ま・・・てよ」

「ウィルズさん？」スバルが言った。

「もうやめてください、ウィルズさん！！！」ティアナが叫ぶ

「知ったこっちゃねえ！！こいつは俺たちの家を壊すんだろ。そんなやつ許せるかよ！なのhさんたちの夢の部隊を簡単に壊せるかよ・・・！そうじゃねえだろ！！！そんなことは俺がさせねえ、そうだろ！ウィルス！！！」と自分の半身に呼びかけた

「ああそうだな。あの男にはちよつとやってやらねえとな！！！」

「まだやるか、ならば来い！」男はそういつと拳を構えた。こうして、第二ラウンドがスタートした。

sideなのは

「はあ・・・はあ・・・はあ」後一匹。まさかこの期に乗じてガジェットが来るとは思わなかった。

私ははやてちゃんと別れた後、隊舎を守るために敵を落としていた。

「あらら～こんなところで本命と会えるとは私も運がいいのかな～」

「あなたは何者ですか？」と殺気を出しながら聞いた

「おお怖い怖い！私殺気だけで死んじゃう。まあ、おふざけはここまでにして、今からあなたを倒すわ」

「なぜ？」

「それは・・・あなたが計画に邪魔だからよ！」と一気に間合いをつめてきた。

うっと思を呑む

まずい・・・。

「レイジングハート、エクシードモードスタンバイ」

<オーライ>

「エクセリオンバスター！！！」

「おっと」なんていいながら相手はかわす。

「あなたたちは何者？なぜそんなことをするの？」

「いずれ分かるわ。でも、六課のようなエースの固まりは邪魔なの、だから、死んで頂戴！」

「くっ！レイジングハート」

<プリテクション>

「今よ！」え？まさか、もう一人

「これであなたはおしまい。」と前の女は笑っていた。

その直後後ろから気配がした。だが間に合わない

誰か、助けて・・・。

その瞬間私たちの足元に魔方陣が広がった

「遅くなったねごめん。」そこには、片手で相手の攻撃をシールドしている、ユーノ君の姿があった。

「くっ！ば、バインド」前の女はいつの間にかバインドをかけられていた。

「くっそ、捕まるわけには！！！」そのとき、何かが落ちてきたそして

「煙幕！？」周りが黒い煙に包まれた。

「大丈夫？なのは」

「うん、ありがとう。敵は？」

「ごめん、逃げられたよ」

「その、約束守ってくれて・・・そのありがとう・・・／／／／／」

と私は顔を赤くしながら言った。

「うん、僕も守れてよかったよ。」

sideなのはout

男と僕の戦いは拮抗していた、

「なかなかやるようだな。しかし」そういうときいきなり後ろから拳が降ってきた。

「ふん、当たるかよ」といいながらかわす。

「さつきとは動きが違う。なぜだ!？」と男は驚いている。

「反射と思考の融合・・・それこそが、僕達のノ（俺達の）あるべき姿だ!」

そういうと一気に距離をつめ勝負をかける

「エターナルスラアッシュ!!!」だが、

「うわああ」と飛ばされたのは僕だった。

「お前・・・!」

「クリス、今はこちらの歩が悪い。またいつか出直そう」そういうと、クリスの仲間らしき男が栗栖と一緒にどこかへ転移した。

「おい、待て!」

「くそ！トリシューラ。トリシューラ？」

<へたれより先にくだばってしまいそうですね。>

「ごめんな、俺の代わりに」

<いえいえ、マスターを守るのが私の仕事です>

「今はゆつくり休め。また直してやる」

<はい、マイマスター>

そういうと、トリシューラはスリープモードに入った

「さて、あいつを追うか。」

「ちょっとまってえ」

「お前！セインか？」

「そうだよ、今日はほんとここを攻めるはずがもう攻められちゃつてて、それで、管理局に潜入してる仲間から、いろいろ連絡があつてさ。これから、私達と一緒に来てくれないかな」

「信用していいのか？」

「向こうに行けばわかるけど、私達は今争っている場合じゃないんだよ」

「分かったついていく」

「ちょっと、いいんですか？」

「今は俺のほう立場が上だ！けが人を集めてセインに続け」

「は、はい」そういうるとスバルとティアナはけが人に応急処置をして僕のところへ来た。

「待たせたな」

「それじゃあ、出発〜！」

sideフェイト、はやて

「なっ！」今私達はありえない人物と遭遇している。

「ジェイルスカリエッティ」

潜入！機動六課（後書き）

はい、今回はここまでです。

なぞの組織。

まだどのくらいの規模にしようとかは考えていませんが一応登場させました。

その組織でいろいろとオリキャラを出したいと思うので、皆さんぜひ、自分が考えたオリキャラを教えてください。

それでは次回へ t a k e o f f

まさか、まさかの共同戦線（前書き）

どうもです。自分の文才のなさに日々落胆しながら今日もがんばって書きたいと思います。

まさか、まさかの共同戦線

sideはやて&フェイト

私たちはデバイスを構えた。

「スカリエッティ、あなたを逮捕し「ちょっと待ってくれたまえ。」
え？」

「私はつかまるために来たわけでもないし、ましては戦うためにきたのではない。」

「うそいえ、これをやったんはあんたやろ」とはやてが言った。

「オイオイ、私はこれに関しては何もしていないよ。今日夜襲をかけるはずだったのだがね、何者かに先を越されたみたいだ。そのとき、私の部下が探ってきた管理局のデータにこんなものがあった」
そういうと、スカリエッティは手に持っていた紙をこちらに投げってきた。

「う・・・そやろ」

「そんな・・・」

そこにはこう書かれていた。

「これより、地上は海へと宣戦布告する。これに邪魔な、六課の面々と共に今まで利用していたスカリエッティの全滅。これを足がかりに、プロジェクトSを始動させる」

「私も、君たちも用済みというわけさ」

「だから、どうしろと！」私は強く言った。

「いやいや、金の閃光は怖いね。ひとつの提案だが、私たちと手を組まないかね」

「誰が、犯罪者と手なんか」「フایتさん」「ウィルズ君？」

「言いたいことはわかります。でも、今はスカリエッティにしたがつて彼のアジトまで同行してきてください。今の六課じゃけが人も手当てできませんし、それに……」

「それに？」

「いえ、何でもありません、とにかく、同行してきてください。お願いします」確かに敵の味とに行くのは気が引けるが、今の六課の状況を考えると、でも……

「わかった、ついてく」

「え？はやて」

「今は、私らの気持ちだけの問題じゃない、私らの部下のこともあるんや」

「そうだね、わかった。私たちも同行します。」

「聞き分けがよくてよかったよ」とスカリエッティは心底ホツとし

た様子だった。

「それでは、ついてきてくれたまえ」

sideフェイト&はやてout

sideなのは

私はなんとか生きていた。ユーノ君に守ってもらいながらだけど。

ガサッ

「誰!」

「すまない。驚かせてしまったようだ。私はチンク。これから私と共にドクターのところへ来ていただけるか？」

「え？」

「なぜ君たちについていかなければならない。」とユーノ君が言った

「すまない。今はなせるような事情ではないのだ。仲間の情報だと、後は、君たちだけだそうだ。」

「わかった。ついてくよ。」

「ユーノ君!？」

「君たちは戦闘機人だろ? 的だった僕たちをアジトに招待するくらい
の状況ならついていくしかない。」

「でも、」

「いいから、僕を信じて、ね？なのは」

「うん」

「話はまとまったか、なぜ貴様が私たちを知っているのか知らないが、ついてこい」

「いくよなのは」

「うん。」

sideなのはout

「はあ、」

「どしたの？溜め息なんてついちゃってさ。」とサインが聞いてきた。

「いや、クリスとかいう男と戦ってな、そんとき俺の相棒ぶっ壊しちゃったんだよ」と苦笑気味に言いながら、ボロボロのトリシューラを見せる。

「あちゃーここまでボロボロだと修理に時間がかかるね。」

「あの、ウィルズさんはこの人とお知り合いですか？」とティアナが聞いてくる。

「ああ、六課にきたばかりの日に、そう、ティアナとスバルを倒した後に戦った。」

「え？あの後に戦ったんですか？」

「ああ、あんときはあまり力使わなかったな、邪魔も入ったし。」

「うううゝあのときのことは思い出したくないよゝゝゝ／＼／＼とセインが顔を真っ赤にしていた

「どうした？」

「なんでもないゝゝ／＼／」

「とにかく速くスカリエッティのところに行かなきゃな。それと、さつきはごめんな、二人とも」

「え？」と二人とも固まる

「いえいえ、別にいいですよ」とスバル

「別に気にしてませんから」とティアナ

「そうかならよかったよ」と僕は微笑んだ

「ゝゝゝ／＼／＼／」となぜか二人とも顔を赤くしていた

「ゝゝゝ／＼／＼／（あの笑顔は反則だよゝゝゝ）」

スバルとティアナがそう考えてるときに僕は

早く次のデバイス作らないかなと思っていた。どうしよう、今度は遠近両用にするべきか、あのクリストか言う男、手ごわい

「そろそろ着くよ」とセインの声で我に返り

「ああそうか、ありがとな道案内」

「いや、別に、私も帰る予定だったから。」

アジトについてみると、みんなそろっていた。怪我をした人は手当てを受けていて、六課の隊長たちはスカリエッティと話している。

「おつ、ようやく来たようだね。それでは、今から重大なことを言う。六課の諸君も聞き逃さぬように」とスカリエッティが言った。

「ここにいる全員が、管理局から追われる身となった。なぜかはまだ不明だが、ミッド地上本部は、どうやら、時空管理局と戦争を起こす期だ。」そういうと

「戦争だ」とか、「なんで」とかいろいろなことが聞こえてきた

「みんな、静かにして」となのはが言った

「私らは、今から海にこのことを伝えなあかん。それに、この件には、なぞの集団がかかわってるらしい。その件については後にして、この事態を打開するために私ら機動六課は、本日を持って、ジェイルスカリエッティと手を組もうと思う。みんなどう思う?」とはやてが言う

「そいつは犯罪者だ」とか「信用できない」「地上とたたくなんて無茶だ」とか聞こえる

「そこでや、いやな人は今から申し出てくれれば別にこのままついて込んでもいい。その代わり、地上から自分のみを守るすべがなく
なるがそれでもええか？」

そう言われ、みんなが暗い顔をする。そりゃそうだろ？今まで信じていた管理局から裏切られて、正直みんな混乱しているはずだ、

「みんなの気持ちはよくわかる。だが、この事件は、みんなが思っているほどやさしいものではない。僕が今日戦った敵は、推定でもオーバーSランク、それにまだ仲間もいるはずだ。そうだなのは、ユーノさん」

「うん、私のところに二人、ユーノ君がいなかったら私たぶん死んでたかも」

その言葉にみんな驚いている。なんせ、管理局のEースが死にそうになる相手がいて、その数は未知数。

「みんなにはよう考えて欲しい。一日待つから、協力してもええ、ついていくっていう人は、明日また話し合つときに言つてな。」ほんなら解散とはやてが言つと、みんなが回りの人たちと話し始めた。

「その、なんかごめんな」

「何で、謝るのかな」

「いや、なんとなくだ」もしかしたら、僕がユーノさんに原作のこ

と言ったから未来が変わったのかも、パラドックスのことをもって考えるべきだった。と一人悔やんでいると、隣から

「お前がなにを一人で悔やんでいるのかはわかんねえ、でも、やり直ったことはしょうがねえじゃねえか」と話かけてきたのはヴィータだった。

「あたしも、守護騎士のときいろんな過ちを犯した。でも、いくら悔やんでも、やり直せるわけねえからな。だから、あたしは前を向いて歩んでいくことにしたんだ」

「そうか、なんか、ありがとうな。」ときこちなく微笑んだ

「べ、べつにお前のためじゃなくてだな・・・／＼／＼」と顔を赤くしていった。

「でも、ありがとう」

「お、おう・・・／＼／」

ヴィータと話して何かが吹っ切れた気がした。過去をくやしがったってしょうがない。

今日は寝るか。そうして意識が途切れた。

～次の日～

「みんな、昨日の答えを聞こうか」「ここから、始まる気がした

まさか、まさかの共同戦線（後書き）

オリジナルって難しいですね。でも、がんばって書きたいと思います。

敵味方問わず、オリキャラ募集中です。よろしくお願いします。

それでは次回へ t a k e o f f

新たなスタート（前書き）

今回は短いです。

超絶的に短いです。

新たなスタート

「みんな、昨日の答えを聞こうか」とはやてが言った。

周りからは、「オツケーです」とか「ここまできたらいいぜ」とか、まあ、満場一致でスカリエツティと手を組むことになった。

「そうか、ほんならまず、みんなに休暇や」

うんうん休暇は大切だよな・・・ってオイ！

「休暇？」と僕が聞いた

「そうや、現状、戦闘は無理や、そうやろ？あんたやってデバイスなしはきついやろ」

「まあ、そりやそうだけど。」

「そついうことでええな」

「うんいいよ。」となのは

「私も賛成かな」とフェイト

「僕もいいよ、スカリエツティたちともいろいろ話したいしね」と
ユーノ

「わかった。僕も賛成。その間新しいデバイスを考えとくよ。」と
いいながら僕は静かに手の中にある残骸を見た。

「ほんならみんな、解散や」とはやてが笑顔で言つとみんな散りぢりに解散した。

それから僕は、機械に強そうな人を集めた。

一人はシャーリー

もう一人はクアットロ

「そんでこうしたいわけよ」

「うゝんできないこともないわねえゝ」とクアットロ

「そうですね、できないこともないと思いますが」とシャーリー

「それじゃ、頼むよ」

「これからどうするんですか？」

「うん？ちよつとね、新しい技の練習をね」

「新しい技？なにそれゝ気になるうゝ」とクアットロ

「あまり使いたくはなかったんだけどね、これは人を殺す技だから。だから、できれば使いたくないよ」と苦笑気味に言った。

「そうなんですか、でもどうしてその技を？」

「うん、クリスが、あいつが放つ殺気が本気で、こっちもいざという時のために用意しとかないとなって思ってたね」

「そうですか、まだ病み上がりなんでほどほどにしてくださいね」とシャーリーに言われた

「そうですね、ドクターは常づね六課のイレギュラーはウィルズだつて言っていましたし、体は大事にしてくださいね」とクアットロに念を押された

「ああ、気をつけるよ」

それから何日か過ぎた。

新しい技もできてきたし、後はデバイスかな。

今回デバイスは2つ注文した。

ひとつは、長距離から敵を狙い撃つ銃のようなもの

もうひとつは、日本刀のような形をしたやつ。モデルは刀語に出てくる完成形変体刀「絶刀・鉋」

なぜこれをチョイスしたかというと、一番作りやすかったらしい、誰かって？メカ好きめがねの二人が

というわけで今日がその完成日ってわけよ。

「おーい、できたか？」

「できましたよーん」とクアットロが銃のほうを持ってきた。

「はいどうぞ」とシャーリーが鉋を持ってきた

「二人ともごめんな、二つも注文して、これのお返しは、事件が解決してから必ずするから。」と二人に言った。

二人は別にいいといったのだが、これでは気がすまないの、好きなことをしてあげる約束で丸く収まった。

「さて、セトアップするか、鉋、トリシューラライト、セトアップ」そういうと、僕はバリアジャケットに包まれた。

今のバリアジャケットは、昔のような洋風のものではなく打って変わった、和風だ

まあ、鑢七花が着ていた羽織と違ってくれればいい。トリシューラライトの場合は、前と同じにするつもりだ。

「うん、いい感じだね」

これから、戦いが厳しくなるかもしれないけど、僕はこの二つ愛機でこの戦いを生き抜こう。そう誓い僕は一人、たたずんだ。

新たなスタート（後書き）

皆さん更新遅れてすいません。

なんかグダグダになりました。

近いうち更新するつもりなのでよろしくお願いします。

新機動六課の休日（前書き）

今回は、原作のエピソードに乗っ取って書きたいと思います。

セリフは勝手に改造しますが・・・。

新機動六課の休日

さて、砲や復活したトリシューラの練習をしながら数日が過ぎた。その間にも、何回か襲撃があった。

まあ、襲撃といっても雑魚ばっかで被害はそんなにひどくない。

そんなこんなで、今日は、我らが新機動六課率いる頭脳派めがね二人組みが、「今日の襲撃は絶対ありえません！」と口をそろえていったので、はやてとスカリエッティなど主要人が休暇をOKしたのだった。

「スカリエッティ」

「なんだね？」

「今日のうちに、ドゥーエをこっちに戻してきたらどうだ？」

「うーん、まだいいかな、ドゥーエにはもうちょつと仕事をしてもらう必要があるから。」

「そっか。まあ、お前も休暇を楽しめよ」

「ああそうさせてもらうよ」とスカリエッティと他愛もない会話をして、僕は自室に向かった。

そう、ここ最近でスカリエッティのアジトはかなり改造された。今までのように、隠したりはせず、堂々と六課のような建物を建造した。これは、明らかな敵対を意味する。聖王教会や海とも協力して地上を占拠したなぞの組織に対してどう戦うか、意見を出し合って

いるのだ。

まあ、そんなわけで、みんなにもちゃんとした部屋があるわけだ。
昔の地面の中みたいなどころでは、さすがにつらくなってきたのだ。
誰がつて？主に男子が、それはなぜか

それはズバリ！

毎日美女たちと一緒に広いところで雑魚寝は精神的によろしくない。
なんだかんだいって、今部隊はナンバーズ含めて、美女が多い。ま
あ、そんな話はおいとして、僕はこの休日で、新たなものを開発し
ようとしている。それは・・・、一時的にその能力がつけるカード
型デバイス。まあ、意思のないユニゾンデバイスとも思っ欲しい

その名も！セラヴィー、アリオス、ダブルオー、ケルディムの4つ。
ぶっちゃけ、前世の記憶にある、

00の機体をパくっただけの4枚。さて、作り始めるか

それから、丸一日・・・。

「ようやく完成。」

ふう、これからテストを・・・

ヴィーン ヴィーン

アラート音？

「ライティング3，4子供を発見したみたいです。」

子供？ヴィヴィオのことが

ってことは・・・まずい！

「おい、今から俺が向かう。FW陣は合流して、そのまま待機してろ」

「あの、どうしたんですか？」とルキノ

「いやな予感がするんだ」実際には予感じゃなくて、確定したことで。襲われる。

ヘリを飛ばすなといおうとしたがもう遅く、なのはやフェイト、はやてたちも現場に向かっていた。

「みんな待ってろ」俺はそう呟き飛び去った

sideなのは

「なにこれ」

「動かないでなのは」ユーノ君が結界魔法を発動した。

「ほう、これは大した魔法だ。」

「誰だ！」

「またあつたわね」と現れたのは

「六課襲撃の」

「そうよ、あの時は邪魔が入ったから、ここで決着をつけさせてもらっわ。公平に二対二で行きましょう」

「なのは!？」ユーノ君の声が聞こえた

気づいたら私はもう一人にかなり遠くまで飛ばされていた。

「……。」もう人はあまりしゃべらないらしい

（なのは、なのは）ユーノ君から念話が来た

（大丈夫だよ。こっちは私がやるから）

（わかった。こっちは僕がやるよ）

（でも、ユーノ君攻撃魔法が）

（大丈夫。僕を信じて）

「あなたの名前は」私は聞いた

「……ウラヌ」

「そう、はじめから全力で行くよ!」

「……。」こうして、私とウラヌさんの戦いは幕を開けた

sideなのはout

sideFW陣

ティ「みんな集まった？」

エ・キャ・ス「はい・はい・おう」

ティ「さて、ウィルズさんが来るまで待機って言われたけど。どうしようかしら」そういった直後

ドゴン！！という爆発音と共に

「その子をいただく。」

ティ「誰」

「我名はヤハウエ・アインソート。その子をいただく。」

ティ「はいそうですかってわたすわけないでしょう」

「やめておけ、貴様らの実力では我にはかなわぬ。そうだな、あのクリスに傷を負わせた男ならいいところだろう。」

ティ「私たちじゃ、相手にならないって？ならまずはその口をふさがせてもらおう」

ティ（エリオは速さを生かして背後を突いて、スバルは囃、キャロはみんなにブーストいいわね）

（はい・はい・おう！）

ティ「行くわよ！」

「ふん、くるか」

ティ「クロスファイヤー！！！」

キャ「ケリユケイオンみんなにブースト」

<OK>

エ「僕は隙をつく役だ、今はじっと耐えるんだ」

ス「うおりゃああ！！！」

「ふむ、なかなかのものだなしかし、」

あいつはなかなかの物といった、その直後

「集うは雷。行つは鎖？ぎ」あいつはそういった、ただ言っただけなのに、直後

ティ「きゃあああ」

エ「うあああ」

キャ「きゃあああ」

ス「うあああ」

みんな雷を帯びた鎖で縛られた

ティ「何よこれ」

「この程度ではつまらん。だが、戦士らしく散らせてやる」

「集うは無数の刃、行うは花びらの舞」

なによ、こんなところで終わり？そんな

「飛竜・・・一閃！」あきらめたときそんな声が聞こえた

「ティアナよ何をあきらめている。そう簡単にあきらめては何もできないぞ」

FW「シグナムさん」と涙を浮かべた

sideFW陣out

sideシグナム

「私の部下が世話になったな」

「六課はここまで戦力を持っているとは、やはり恐ろしい。」とフ
ードの男が言う

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

ガチャン、ガチャンとこ気味のいい音が聞こえる。

「ふむ、貴様なら相手が多少務まりそうだな。プリズムカリバー久々にやれそうだ」

<そうですか、全力で相手をさせていただきます>

「ふむ、ならば行くぞ！騎士よ」

「はあああ！！！！」

ガキン！ガキン！と何度か打ち合った

「貴様なかなか」

「お前こそ」なぜだか楽しい

「我と同じ性格のやつがいるとは」

「どういうことだ？」

「貴様も戦闘狂だろ？」

「ふん、お前もか、ならばしばらく打ち合つとするか」

「望むところ」といいながら、しばらく打ち合っていたが、そのとき

「ぶち抜けえええ！！！！」

<ラケーテンフォーム>

「む？邪魔か！集うは光、行うは障壁」

「おまえ、何もんだ！」ヴィータであるいいところだったのに
いつの間にやら、FW陣も復活していた。

「ぐう・・・六対一か、さすがに、歩が悪いか」

「逃げるのか！」

「貴様！名はなんと云う」

「シグナムだ、貴様は？」

「ヤハウエ・アインソートだ。この決着はまた」といつて帰って
いったがまた戻ってきて

「言い忘れた。お前らの戦力のエンゲル係数高すぎだ。何れ力の重
圧に耐え切れなくなつて瓦解するぞ！」

そういうと、ヤハウエは帰っていった。今度こそ。なんだったんだ？

sideシグナムout

side???

「狙いはどうだ？」

「問題ないよ」

二人の人影がビルの屋上からへりを狙っていた。

「ネプチューンに頼んで、挑発してもらうか」

「そだね」

side???out

sideヴィータ

「逃がしちゃったな」

「そうですね、申し訳ありませんでした」とティアナ

「そうだな、もうちょっと冷静にな」といっておいた

？「そこの人たち？よろしいかしら」

「誰だ！」

？「攻撃したって無駄よ？今しゃべってるのは、幻影だから」

？「一休みもいいけど、お仲間は大丈夫にや〜ん？」

「何だと！？」

「高魔力反応！推定Sランク！狙いは・・・ロングアーチヘリ！」

「なに？おい！おまえ、仲間がいんのか？おい、答えろ！」

？「さあね？最後に・・・あなたはまた・・・守れない」

「ちくしょおお！！！」

？「きゃあああ、危ない人」そういうと、なぞの女性は消えた。

キャ「反応ロストです」

「ちくしょー誰か、へりを守ってくれ」

sideグイータout

side????

「5 , 4 , 3 , 2 , 1」

「シュート」

side???out

くそう、テストまだだったのに、

「いけ！アリオス！」僕はアリオスを起動した。

「トランザム！」

side????

そう声をかけられて血の気が引いたなぜならさっきまでへりにいた
真っ赤な人が今日の前にいるのだから

side???out

「そんなに驚かなくてもいいんじゃないか？」

「ば、バインド？」

「く」

「まあ、痛いことはしないから、話聞かせてくれよ。まず、お名前は？」

「私は、陰の九星が一人。ヴィーナス。」

「俺は、同じく陰の九星が一人。ジュピター」

「あんたらの組織名は何だ？」

「それはいえない。」といったのはジュピター

「そうかいじゃあ」といいかけて、やめた。

「鉋！」

<了解>

ガキン！

「今度は何だ？」

「私は「バインド」え？あれええ？」こいつ、いがいとドシっ子だ

「はい、お名前は？」よくみると見た目小学生だ

「私は陰の九星が一人、神速氷将のマーキュリーだ」

「それはそれは、二つ名までどうも。」

「しまったあああ！！！」こいつ大丈夫か？

はやて「へり攻撃したやつらはどうなった？」

「ごめん逃げられたわ」

「「「え？」「」」

は「そうか、なら早めに帰ってきて」

「おう」と俺はそう答えて通信をきった

マ「どうして、」

「まあ、お前らは、なんか嫌いになれなくて」と笑った

ヴィ「面白い人だね」

ジュ「いいのか本当に」

「ああ、いいから早く行け。俺がなんとかごまかしてやるから」
ジユ「すまない」

「おう、またな」と俺は微笑んだ

マ・ヴィ「……また／＼／＼」なぜか、顔が真っ赤だ

「どうした熱でも」「ない!」「そんな大きな声出さなくても」

「まあ、とにかく早く帰れ、早くしないと、金の死神と、管理局の魔王がくるからな」

俺がそういうと、3人は口々にお礼を言って帰っていった。最後に、マーキュリーが

「名前は？」

「は？」

「お前の名前は？」

「ウィルズ、ウィルズ・レータだよ」

「そうか」そういうと、マーキュリーも帰っていった。

「はあ、散々な休日だよ。ほんとに」そういいながら俺は帰路に付いた

新機動六課の休日（後書き）

ヴィヴィオまったく登場しなかったですね^^；

今度は登場させます。なのはがママになる話ですね。

近いうち更新するので楽しみに〜

最後に「月光閃火」さん、オリキャラありがとうございました。早速使わせていただいています。 早

それでは、次回へ t a k e o f f

ママ誕生！（前書き）

原作どおり、なのはがママになります。

それからちょっと敵との一戦も書きたいかなあゝなんて思っています。

ママ誕生！

なのは「なんですって！保護した子がいなくなっただ！？」

「おいおい、落ち着けて、まだあいつらって決まったわけじゃないんだしょ」と僕は言った

ユーノ「そくだよなのは、今から教会にいつてみようよ」

なのは「うん、そくだよね。落ち着かなくちゃ」

ユーノ「というわけで、僕となのはは、教会に行ってみます」

はやて「わかったよ、ほんならお願いな」

「はあ、」

はやて「どうしたん、溜息なんてして」

「いや、昨日ヘリをやったやつ、明らかに悪者ってわけでもなさそうで」

はやて「明らかにって・・・もしかして会ったん？」

「いや、なんとなくだよ、なんとなく」まずいまずい、報告ではすぐ逃げたことになってんだっけ？

はやて「ふゝん」そんな人を疑うような目はやめよう

「だから、なんとなくだよ。な・ん・と・な・く!」

はやて「そこまで言うならええけど」なんとか引き下がってくれた
それから、なんとなく、街へ出かけてぶらぶらしていると、

「ぶぎゃ」

「はい?」と声がしたほうをみると、

「貴様!分かつてるのか、この私は、陰の九星、神速氷将のマーキ
ユリーだ!」

「おい、お前、またまた二つ名ご馳走様です」と僕はご丁寧に両手
を合わせた。

「なななな、何でお前がいるんだあああ!!」あーあうるさい
子だね!

「はいはい、ちょっとみんなの迷惑だからこっち行こうね」

「私は、子供ではない、はなせー、このやろー」

「はいはい、文句は後で聞く、おとなしくついて来い」休日最初の
出会いがこいつか、はあ、不幸だ・・・。

sideなのは

シャッハ「すいません。こっちの不幸で」

「いや、別にシャッハさんのせいじゃないんですし」

ユー「じゃあ、手分けしてその辺探そうか、子供の足じゃそう遠くにはいけないはずだし」

「そうだね」

それから私たちは手分けをして、保護した子、ヴィヴィオの事を探した。

探し始めてからちょうど30分ほどたった頃

「あ」

ヴィ「うわぁ」と泣きそうになりながら逃げようとした

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「ママがいないの」

「ママ？」

「うん、ママ」

「そうか、なら、私がママになるつか？」と私が言ったとき、ユー君が来た

「なのは、見つかったの？」

「うん、ちょうど今ね」

「なのはママ?」

「うん、なのはママ」と私が微笑みながら答える

「じゃあ、こっちはパパだ」とヴィヴィオがパーと顔を明るくして
いった

ユ・な「え・・・／／／」

「へ、変なこと言わないでよ、ユーノ君とはそんな・・・／／／」

「ユーノパパ」とヴィヴィオは私たちの気も知らずに一人ではしゃ
いでいる

「なのは、あきらめよう、ほら、こんなにうれしそうなんだから」

「うん、そうだよな」

sideなのはout

「で、お前は何でこんなところにいる」

「それはこっちのセリフだ、お前こそなんでこんなところにいる」僕
とマーキュリーは、すばらしい追いかけっこを演じているうちに疲
れ果て、そこらへんにあったカフェで休んでいる

「まあいいけど、ほんとドジだよな」

「ドジとは何だー」とまるで小学生のように口を尖らす

「もしぶつかつたのが僕じゃなかったら、どうしたんだ、二つ名まで丁寧に、もし内の組織のやつらだったら」

？「誰が内の組織だって？」あれ？おかしいな、こんな殺気を食らう覚えは皆無なんですが

「うわ、スバル！」

ス「今打ちの組織とか言つてなかったけ」

「気のせいだよ、そう気のせい」

ス「ふう〜ん、それよりこの子は誰！まさか、さらってk「きてねえ！！！」なんだ」

「お前は何でそんなにがっかりしてんだよ」

ス「だって面白いじゃん？」じゃん？て聞かれても困ります

マ「お前、誰だ、怪しいやつならこの陰のky「わあああ、ストッブ」むぐうつう」と僕はあわててマーキュリーの口をふさいだ

マ「何をする！！！」

「お前おれの仲間に招待明かしてどうすんだよ」と僕はひそひそと話した

ス「ねえ〜二人で何はなしてんの」

「いや、こいつは、俺の後輩子供でな「誰が後輩n」黙れ！マーキ

ユリーってんだ」

ス「へえ、面白い名前だね」

マ「面白いとは何事だ！」

「ああ、もう喧嘩はだめだつて、もう日が暮れるし、」

ス「そういえばそうだね、じゃあ、私はさき帰るね」

「おう」

「で、お前はどうすんだ、帰る場所とかあんのか？」

「ないわけではないが、その・・・／＼／」

「どうした？」

「その、ウィルズの家に行きたい・・・／＼／」

「あの、なんですつて？家に行きたい？」

家に行きたい、つまり、いや、そんなフラグ立てた覚えはない、ということは、敵地の調査

「いいわけないだろー！！！！敵をはいどうぞって通すわけにはいじやないんだよ！」

「うつ」と涙目になって

「そうだよな、私は敵だもんな、仕方ないよな」ともう泣きながら言われるもんだから

「いいよ、来いよ。」

「え？」

「だから、来いって言ってんだよ、お前一人置いてくわけには行かないからな」

「いいのか？」

「何度も言わせるな」

こうして、敵幹部と一緒にのお泊りが始まった。

ママ誕生！（後書き）

はい、今回はここまで、

更新の遅れてすいませんでした。

ちよつと構想がまとまらなくて。

それでは次回お楽しみに^^

敵とお泊り（前書き）

更新遅れてすいません。

今回は短めです。

それではどうぞ

敵とお泊り

「ただいま」と誰もいない部屋に言った

「お邪魔します」とマーキュリーが遠慮がちに言った

「そんなとこでじつとせずに入れよ」

「うう、わかりました」

「ごめんな、大したものないからさ、ちょっとまって、今夕飯作るからさ」そういうと、僕はエプロンに着替えてキッチンへ行った

「いいよ、そんなに気を使わないで」

「まあ、今日はお前が客だしな、いいから黙って待ってる」

と僕は、マーキュリーを黙らせて、キッチンへ向かった

「さて、どうしよう、まあ、ベタだけどカレーでいいか」

でもな、こういう風の吹きまわしだろう、敵幹部が家にいるなんてな

sideマーキュリー

部屋で待っててって言われたけど、どうしよう・・・／／緊張する

ウィ「もうすぐできるからな」

「はヒイ」あまりに緊張しすぎてすつとんきょんな声を上げてしまった

ウイ「大丈夫か？」

「大丈夫です・・・／＼／」

（今日ぐらい、敵も味方も関係なくすごしていいよね）と私は心の中でそう思った

sideマーカーキュリーout

「というわけで、完成」パチパチパチ

「わーい、」とマーカーキュリーも喜んでいる

「それでは」

「「いただきまーす」」と二人で合掌

「うーん、今日も成功」

「おいしい」マーカーキュリーも喜んでくれてよかった

それから、二人でゲームしたり、テレビ見たりしてあっという間に
終身時間

「マーキュリーは俺のベッド使ってくれ」

「ウィルズはどうするの？」

「俺はここで寝る」とソファーを指差した

「だめだよ、」

「いやいやいや、さすがに一緒はまずいって」一応わたくしも一健全な男子であるわけで、間違いを起こさないとはい限らないわけですよ

「いいからここで寝よ」

「うう」「こう見つめられると男は弱いわけで・・・。

「わかった・・・」折れました

「んじゃ、電気消すぞ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

sideマーキュリー

（私なんて大胆なことしたんだろ・・・／＼だつて、一応男の人だよ、）

グウZZZZ・・・

「もう寝ちゃったんだ」なんか一人で騒いで馬鹿馬鹿しい

「でもいつか、おやすみウィルズ」

sideマーカーリ out

敵とお泊り（後書き）

日常てきシーンを書こうとしたんですが、やっぱりうまくできないですね。

次回からちょっとシリアスにしようかな、と思っています。

それでは次回へtake off

六課壊滅〱序章〱（前書き）

六課壊滅を書こうと思います

更新送れてほんとに申し訳ありませんでした。

六課壊滅〜序章〜

敵さんとお泊り会からはや数週間。

あの時は気づいたらマーキュリーは帰ってしまっていた。

「朝飯ぐらい食ってけばよかったのに」

「え？何だって？」と隣に座っているのはさんが聞いてきた。

「ああ、こっちの話」

「む〜気になる〜」

「あ〜はいはい、それより、今日は、予言のことが起こりそうな日ですね」

「そうだね、気を引き締めなきゃ」

予言とは何か、それは数日前にさかのぼる

僕たちは、海の3提督、クロノさん、僕と六課の隊長たちで、聖王教会に行き、これからのことについて話し合った。

そのとき、カリムさんの予言に新たなものが現れた

「世界は、混沌に包まれ、崩壊の一途をたどる、星の光を持つもの、雷をつかさどるもの、夜天の主、4つの羽を持つもの、これに立ち向かう、しかし、道半ばで絶望し、再び世界は・・・」

「道半ばで絶望って物騒な話ですね」と苦笑気味に言うと

「笑い事じゃないよ、分からないことだらけだし、夜天の主はたぶんはやてちゃんだし、星のなんたらって私でしょ？雷うんぬんって言うやつはフェイトちゃん、でも、4つの翼はわかんないな」

「そうですね」たぶんそれは僕だ、今僕はガンダム4機を本格的なユニゾンデバイスにしている。

だから翼とは4機のガンダムだろう。でも、このことはみんなには言えない。なぜなら、これは戦争の兵器、非殺傷能力が当たり前のこの世界では、あまりよく見られないやつだ。

「お互いががんばりましょう」

「うん」そういつて僕らは別れた

数時間後

はやて「カリムから、新たな予言が出たって連絡が入った。この前行ったメンバーは至急一緒に来てくれ」

「「わかりました」」

カリム「新たな予言ができました」

「再び世界は混沌に包まれる、しかしそこに、数多の英雄が集い、命の輝きを放ち、二つの拳があらゆるものを打ち消し反射するだろう……そして、聖王と星の光がぶつかり戦いは終焉を迎えるだろう」

うゝ

「数多の英雄？」とはやてがいった

「わかりません。しかし、世界が滅びない可能性が高くなってきました。」

「たぶん聖王はヴィヴィオだ、そして、星の光はなのはさん、二つの拳は、イマジンブレイカーとアクセラレータでしょう。」

「はじめの二つはいいとして、あとの二つは何？」とフェイトさん。ヴィヴィオはいいんですか？

「まず、アクセラレータ、僕のベクトル操作の元になった人物です。そして、イマジンブレイカー、

これは能力名でして本名は別にあるんですが、この能力は、異能と呼べるものすべてを打ち消してしまう能力です。つまり、僕たちが今使っている魔法もすべて打ち消せます。」

「それなら最強じゃない？」となのはさん

「いえ、確かに能力はすごいですが、考えてみてください、打ち消す以外何の力のない、ただ普通の人、回復魔法も打ち消してしまうため、傷だらけなんですよ。しかも、その力は右手にしかありません。」

「右手？」

「はい、右手のみです。なのはさん、もしあなたにその力があったとして、それだけで戦えますか？」

「私は・・・」

「まあ、分かってくればいいんです。力がすべてじゃない、それはもう皆さん知ってるじゃないですか。」

side ???

？「ここどこだ？」俺は確か・・・フィアンマとの最終決戦で、相打ちになってそれから・・・

？「おい、ここ何処だよ」俺は、打ち止めを助けるために戦って、そして、目の前がまぶしくなって・・・。

六課の面々が「話していた頃、物語のキーパーソンがようやくこの世界に降り立った。」

side ??? out

六課壊滅〜序章〜（後書き）

序章とっておきながら、敵が出せませんでした。

本当に申し訳ありません。更新遅れてすみません。

誤ってばっかですいません。

次回もがんばるのでよろしくお願いします。

六課壊滅〜序章?〜（前書き）

かなりの期間が開いてしまいました。ほんとにすいません。

都合により、4〜5部作になりそうな予感。

時間はかかるけど、気長に待っていてください。

六課壊滅く序章??

は「まず、FW陣は、スターズ、ライトニングは関係なく、ミッド地上にある、時空管理局の地上本部の護衛を、隊長たちは、新機動六課の防衛、スカリエツティ率いるナンバーズ部隊は、ミッド地上に潜入、首謀者をできればたたいてくれ」

全「了解！」

「さて、最終メンテだ」そう、今僕はデバイスメンテの真っ最中なわけだ。

結局実戦では使っていない、スナイパーライフル型のトリシューラはシャーリーたちに頼んで、元に戻してもらった。「これでまた戦えるな」僕は決着をつけなければならない。トリシューラを真つ二つにした、クリスに、なんだかんだで仲良くなったマーキュリーに、その他大勢の敵たちと

「大丈夫かな」思えば僕はこんな戦いとはまるで関係ない世界で生きていたことがあった。毎日決まった時間に起き、学校に行って、友達とバカ騒ぎして、そして帰ってきてゲームしたりネットしたり勉強したり、「こんな僕でも世界が救えるのかね・・・。」おっと、ちよつと感傷に浸ってしまった。

？「ウィルズさん」

「はい」扉を開けると、スバルがいた。

ス「ウィルズさん、私大丈夫でしょうか。」こいつも心配なのか

「大丈夫だよ、仲間を信じろ。もしピンチになっても、絶対に誰かが駆けつける。もし誰も来なかったら、一番来て欲しい人の名前を叫ぶんだ。叫べなかったら、心で訴えるんだ。分かったか？」

ス「はい！」

まあ、僕にはこれぐらいしかいえないけどさ、さて、まずはどのユニゾンで行こうか・・・まずはこれだな。

side???

「さっきから見慣れた場所だな、いったいここはどこだ？」

「ったく、なんだここは、あん？」と聞き覚えのある声が

「一方通行！」「あん？上条当麻か」二人がお互いを認識しあったそのとき、

「誰だ！」「ここは、ミッド地上本部だぞ！」

「なんだそりゃ！」「抵抗するなら」男の一人がそういうと、いきなり杖を構えた、直後、ビームらしきものが飛んできた「ったくしやあねえな」あきれながら一方通行は電極のスイッチをオンにした。いつもなら反射で対処できるのだが、なぜか、これは反射ではなくはじく形になった。「あん？ロシアのときと同じ形だな」一方通行は魔術に対して使用したときと同じ疑問を抱いていた。「ここは俺たちの世界とは違いそうだな」「そんなことはかんけいねえ」そう

いうと、上条は右手を前に出した、ガキンという甲高い音が鳴り響くと、そのビームのようなものは打ち消されていた。

「な、何者だ貴様ら！」

「名乗る必要なんかねえよ！この三下が！」そういつと、一方通行が拳銃で男たちの足を撃った

「これで少しは動けなくなるだろ」そういつと、二人はミッド地上に向けて走っていった。

何かいやな予感がする。上条はそう感じていた

side上条、一方通行out

は「これより、ミッションを開始します！」

全「了解！」

「セラヴィーセットアップ、隊長たちは、先に、切り込んでください。ここは僕が死守します！」こうして、予言の日が始まった。そう、とても長く感じる、一日が・・・。

六課壊滅〜序章?〜（後書き）

はい、いまだ敵が出てきませんでしたが、一応構想は頭にあります。

だから、一応今度は、一週間の間には更新する予定です。

それでは、次回「六課壊滅〜破?〜」にtake off

六課壊滅ゝ破章ゝ（前書き）

遅れてすいませんでした。

これより、破章始まります。

六課壊滅〜破章〜

「圧縮粒子開放！」そういうと僕は、セラヴィーのダブルバズーカからビームを放った。あたり一面のガジェットをなぎ払っていく。

は「なんや、あの性能・・・。」圧巻だった。ウィルズがでか物になってひとり空で戦っている。

な「あ、危ない！」私がそんなことを考えてるうちに、周りを囲まれてしまった。

な「ウィルズ君私が加勢に「いい、来なくていい！」なんd「何でもだ！」

「奥の手のひとつを使うぞ！セラヴィー」（了解）

sideなのは

私が見たのは、六本の腕に一本ずつビームでできたサーベルを持つウィルズ君の姿だった

は「なんや、あれは・・・。」

フェ「でも、」押されている。数で圧倒されているのだ。

な「やっぱり私が」そういいかけたとき、

sideなのはout

「やっぱりこれでもきつい、ここでは、まだ・・・」

（上だ！）

「く！GNフィールド！」GNフィールドをつまぐ使い、少しずつだがガジェットの数を削っていく。

そのとき、敵の奥のほうに、

「マーキュリーか・・・。」

「セラヴィー、ちょっと休憩してていいぞ。」

（わかった。）

「ふう、」僕は、普通のバリアジャケット姿に戻り、

「ケルディムセットアップ！」

（オーライ）

「ケルディム、目標を狙い打つ！」

sideなのは

「姿が変わった・・・。」

そうしていると、

は「これより、隊長3名は、地上本部、もとい、敵組織の殲滅に向かいます。その他の六課メンバーは、はじめの命令どおりに進んでください」

（了解！）

私たちは、敵組織、組織名「オリオン」への進行を開始した

sideなのはout

「シールドビット！」

（了解）

ビットを駆使して、あたりのガジェットをあらかじめ片付けた

「ケルデイルム、休んでいいぞ」

（わかった）

「マーキュリー」

「ウィルズ」二人の間に緊張が走った。この間はほんの数秒だったかもしれない。だが、僕たちには数時間にも感じたのだった。

マーキュリーの体がぴくつと動いた。

「うおおお……！」マーキュリーが目にも留まらぬ速さで突っ込んできた。

「トリシューラ！止めるぞ！（はい）絶対止めるぞ！（はい！）トリシューラ、セツトアップ！」

なつかしのバリアジャケットに、なつかしのデバイス。

ガキン！と打ち合った。双剣と槍ではリーチの面ではこちらに歩がある。しかし、速さの面ではあちらに歩がある。いわゆる一進一退の攻防とやらをやっているわけだ。

「なぜお前がああ組織にいる」

「そんなこと・・・！」

「なぜお前と戦う必要がある！」

「・・・っ！」

「このままでは決着がつかない」

「だから、」

「しかたない」

「フルドライブ！」

「ドライブイグニッション！」

「これで決めるぞ！」

「わたしだつて・・・」

僕は、周りの魔力をトリシューラに集めていく

「エターナル・・・」

「フォトン・・・」

「「スラアアッシュ!!!!!!!!!!」」二人の渾身の一撃はぶつかり、
そして・・・

僕立っていた。マーキュリーを抱えて。

「大丈夫か？」

「負けちゃったか・・・。」

「でも、よかった、これでお前もやっとこの戦いの運命から・・・
「危ない！」え？」そのとき僕は自分の恨んだ。自分が油断してな
ければ避けるのは容易な攻撃。自分の油断が、慢心がまさか、

「よ・・・よかった・・・ゴバア」マーキュリーを重症を負わせるこ
とになるなんて・・・。

「ふむ、いらなくなった、ものは、即座に消さないとな」

「デメエ今なんて言った」

「負けたものなど、もはや不要だと「取り消せ！」なに？」「マーキ

ユリーが不要だという言葉を、即座に取り消せ！」

「トリシューラ、ちょっと、休んでいいぜ」そういうと、僕は、マーキユリーの元にいき「お前のこのデバイス借りるな」

「お前、名前は」(ヘル・・・)

「そうか、いい名前だ」

「行くぜヘル！敵討ちだ！」

(わかった・・・)

「ヘル、セットアップ」その刹那、すごい吹雪が僕の体を包んだ

「これは、」とても鋭利的なデザインの、言うならば、二人のバリアジャケットを足して二で割った感じの姿になった。

「それでも、双剣の使い方は、少々心得ているのでな！」

「ならば来い！」こうして、俺と、クリスとの2度目の戦いが始まった。

sideFW陣

ティ「ここで待機しましょ」今こころは、地上本部前、といっても昔はというだけである。
いまは、オリオントの本拠地。

ティ「ここから分かれて戦うわよ」

ス・エ・キャ「了解」

でも、私は今判断を後悔した

なぜなら・・・。

「ようこそ、私は、陰の九星が一人ジュピターだ」

待ち伏せされていたからだ・・・。

side エリオ・キャロ

「私は、陰の九星が一人、ヴィーナスだ」

side スバル

「ギ、ギン姉」

「ん？私は、陰の九星が一人、マーズだ」

side シグナム

「またお前か・・・。」心底あきれたように言うと

「またとは何だまたとは。」

「エターナル」

「スラアアアアアッシュ!!!!!!」

予告通りにならず一部変更になる場合がありますのでご了承ください。

六課壊滅〜破章〜（後書き）

どうでしたでしょうか、マーキュリーが瀕死ですね。

これからどうなるんでしょう。

次回も波乱の予感？

それでは、次回へ t a k e o f f

六課壊滅〜破章ウィルズVSクリス〜（前書き）

かなり間が空いてしまってますいません。

構想がうまく練れなかったので遅くなってしまいました。

それでは、ウィルズVSクリススタートです！

六課壊滅〜破章ウィルズVSクリス〜

「機動六課所属、ウィルズ・レータ三等空尉」

「劫火の将、クリス」

「参る！」

「行く！」

「（ウィルス、前置きなしだ！オツケー相棒・・・！）いくぜえええ！！！！」

反射と思考の融合、ベクトル操作のフル稼働、治癒能力をできる限りフル稼働して、僕は、ただ、斬りつけた・・・。

「お前だけは、お前だけは・・・絶対に許さない・・・！」

「こちらは許して欲しいわけではないのだがな」

ガキン！ガキン！一撃、一撃打ち合わせていく

「なかなかやるではないか、だが、まだ・・・！」

「こんなもんじゃなねえだろ！そうだろ、ウィルス！」

「なに？いきなりパワーが・・・しかし」

「一気に行くぜ！カートリッジロード」

(・・・ロード・・・カートリッジ・・・)

「エターナル・・・スラッシュ!!」

ドゴオオンン!!! 爆風・・・。

「やったか、？」

「なるほど、なかなか、だが! 貴様はまだ甘い!」

「なに!？」

「こちらから行かせてもらう! 劫火・・・一閃!」

「くう・・・やはり、実力差はまだ・・・」

「まだまだいくぞ!、劫火弾」そういうと、無数の炎の弾がこちらに向かって四方八方から飛んできた。

「いくら実力差があろうとも、お前だけは、お前だけは・・・!」

僕は、ある弾は避け、ある弾は双剣で裂き、ある弾は弾き、クリスへと接近した

「ならば仕方ない、こちらにも退けない理由があるのでな!」

「譲れない理由はこちらにもある!」

「セカンドフォーム、モードリリース」

(OK・・・スピアフォーム)

「一閃必中！雪華一閃！」クリスに命中し、爆煙の代わりに、空に一輪の花が咲いた

「はあ、はあ、はあ、これで・・・」今のはさすがにやばかったなになに？」

「この私に、本気を出させるなど、光栄に思え、この技を見たのは、今まで数えるほどしかない」

「デスⅡクラッシャー、その名のとおり、殺す・・・業だ！」

「ぐああああ！！！！！」

「終わったか、なかなか「・・・・・・s yらっしゅ」？」

「危なかったぜ、治癒能力、異常な反射、ベクトル操作、この3つをすべて使い、このザマだ・・・。」

「なぜ、死なない・・・。これは、必ず死を与える「だが、結果的に俺は死んでない。受け止めるよ、お前は完璧でもなんでもない！、所詮、神になったつもりの人間だ！」

「そんな・・・、バカな！俺は、私は！」

「バインド」俺のバインドが、クリスを、捕らえる

「ありえない、私の戦いが、たかが人間に・・・、そんな」

哀れだよ、自分は天才だ、完璧だ、そう勘違いして、人外気取って
たんだからな

「集え、星の光よ・・・。」

俺の周りに、魔力が集まってくる

「ツインブレード」

俺はデバイスを通常モードに戻し、

「なのはさん、あなたの無茶、借りますよ？」

「ト・・・ランザム」そういうと、俺の体を、青白い光が覆う、これはガンダム能力と同じだが、GNDライブがないので、体の潜在能力を引き出すために、8年前から欠かさず毎日やったトレーニングで身につけた業だ、でも、これは諸刃の刃、使った後は一定時間恐ろしい疲労感と、魔力を失う。

「うがあああ！！！」クリスは無理やりバインドを引きちぎり、こちらに向かって突進してきた

「しねええ！！！」

「哀れだな、お前らしくない……。もつといい戦いがしたかった・
。。。」

「劫火一閃、バーストアタック！！！」クリスが最後のむちゃくち
やな攻撃をしてきた。

魔力の光が、ヘルの刀身に集まっていく。。。

クリスの一撃を片方の刃でいなし、もう一方で斬りつけ、
いなした一方でクリスに刺し

「スパア！」きりつけた一本を、セカンドフォームへそれをクリス
に突き刺し、すぐに刺してあったもう一本と一緒に抜き……

「サイズ！」二つの剣と槍を魔力で大きな鎌にする

その姿はまさに、ヘルのなにふさわしい姿だった

「この私が……、こんなやつに、こんな甘い戦い方のやつに！！！」

「受けてみる！」

「これが！」

「俺と、マーキュリーのいや、俺たちの」

六課壊滅〜破章ウィルズVSクリス〜（後書き）

なんとクリスと決着をつけられました。

次は、シグナムさんでも書こうと思います。

感想&意見募集中です。

それでは、次回へ

t a k e
o f f

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8519m/>

魔法少女リリカルなのは 守るための戦い

2011年1月5日17時36分発行